広島市の文化財　第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告

1984.3

広島市教育委員会

5．大　谷　遺　跡

（1）調　査　の　概　要 ……43

（2）検　出　の　遺　構 ……43

（3）検　出　の　遺　物 ……49

（4）小　　結 ……50

（1）調査の概要

本遺跡は，本遺跡群の南側の尾根上にあり，長う子遺跡より230ｍ，芳ヵ谷遺跡より約150ｍに位置する。武田山から，派生した丘陵が，標高180ｍあたりで，芳ヵ谷遺跡の序在する尾根と分岐して下り，標高150ｍあたりでゆるやかな平坦面となり，ここより先端にかけては，こぶ状に連続して２ヵ所に頂部平坦面が，見られる。その間は，比較的深い鞍部となっている。山側のこぶ状の頂部からは，さらに小支丘陵が分岐してしてる。

試掘調査によって，標高145ｍあたりで竪穴式住居跡が確認されていたため，この地点をＡ地点とし，２ヵ所のこぶ状の頂部のうち，山側の頂部からは小形石棺が確認されていたため，芳ヵ谷２号古墳とし，ここより分岐した小支丘陵上の部分をＢ地点とした。Ａ地点は尾根中心線で２分割し，きらに各区を４分割して調査区を設定し，必要に応じて拡張を行い，各区間にはベルトを残し，最終的に撤去し調査を行った。小形石棺が確認された尾根頂上部は，試掘調査によって，他の遺跡は確認されていなかったため，石棺周辺に調査区を設定した。Ｂ地点は，試掘調査では，遺構，置物ともに確認されなかったため，調査対象区域より除外したものであるが，地形状態から遺構の可能性が強いと考えられたため，尾根中心線にトレンチを設定し，必要に応じて拡張を行った．

なお，Ｂ地点先端部に位置する古墳は，芳ヵ谷３号古墳と呼称し，工事区域外にあたり，現状保存されるものである。しかし，工事区域に近接しているため，工事による影響が考えられるとともに試掘調査時に大半が露出したため，全容を把握のため調査を行った。しかし，現状保存されるため，調査範囲は最低限度とし，十字のトレンチを設定し，必要な部分を拡張して調査を行い，終了後埋め戻しを行った。

（2）検出の遺構

Ａ　地　点（第75図）

本地点からは，竪穴式庄居４～５軒，墳墓１，テラス状遺構１を検出した。

竪穴式住居は，尾根の高い方から下万に向けて順次１号～５号住居とし，墳墓については，大谷古墳と呼称することとした。

以下，各遺構毎に概要を述べていくこととする。

第１号住居跡（第76図）

本地点の最高所の尾根上平坦面よりやや北側斜面に寄った部分から検出した竪穴式住居跡である。検出した掘り方は，平面だ円形を早し，長径5.8ｍ，短径4.8ｍ（推定）を測る。ゆるやかに傾斜する地山を，西側で最高53㎝掘り込んでおり，東側に至って掘り方は消滅している。壁構は，南西側の一部を除き，検出した壁に接してめぐらされており，幅15㎝～20cm，深さ4cm～5cmを測る。（Ｐ１～Ｐ10）。この内，主柱穴と考えられるピットは，Ｐ１，Ｐ３，Ｐ５，Ｐ９の４本と考えられる。柱間は，2.1ｍ～2.3ｍを測り，建て替えが想定され，底面は，ほぼ均一のレベルとしている。

遺物は，床面から少量の弥生土器が出土した他，こぶし大程度の角礫が出土した。出土した位置は，西半部の壁に近接して出土している。又，南西部の壁直近からは，平坦な角礫が出土した。作業台として使用したものと考えられる。

床面のほぼ中央部からは，方形プランを呈する土壙が検出された。墳内からは，須恵器，鉄釘が出土し，墳墓と考えられる。

第２号住居跡（第77図）

第１号住居跡の南側約５ｍの南側斜面から検出した竪穴式住居跡である。傾斜する地山を，最高で55㎝掘り込んで床面としており，南半部の掘り方は，傾斜面のため消滅しており，この部分は盛り土としたと考えられる。掘り方は，円形プランを呈し，径約４ｍと推定される。壁に接して，壁溝がめぐらされており，幅20cm～30㎝，深さ２㎝～５cmを測る。床面からは14ヵ所から小ピットが検出された。位置・規模から考えて，床面の奥側の１本が主柱穴と考えられる。このピットは，径26㎝，深さ45cmを測る。他の３本は床面より約20cmの深さしかなく，主柱穴とは考えにくい，従って，本住居の柱穴の数は明確にしがたいが位置関係から２本又は，４本と考えられる。

遺物は，柱穴の間の床面から，少量の弥生土器片，角礫が出土し，西側壁溝上に，床面より約30cm浮いて小形鉄斧が出土した。

第３・４号住居跡（第78図）

第２号住居跡の北東約10ｍの尾根鞍部から検出した竪穴式住居跡である。検出した掘り方から２軒の重複が確認された。住居番号は山側に寄った住居を３号住居，先端側に寄った住居を４号住居とした。尾根中心線に残したベルトの土層観察からは，自然推積の状態が観察された。この土層の内，最下層には暗カツ色から黒色の土層が見られるが，この土層内に，明瞭ではないが，掘り込んだと考えられる土層変化が観察された。この掘り込みと考えられる部分は，４号住居の掘り方と一致しており，このことから，３号住居より４号住居が新しいことが確認された。

第３号住居は，尾根中心線より若干北側斜面に寄って検出した。斜面に近い位置にあるため，壁高は斜面に寄るに従って減じ，東端部では消滅している。掘り方の西外側からは、長さ4.5ｍ，高さ最大54㎝，最大幅70㎝の狭小な平坦部が検出され，さらに，掘り方南外側からは，長さ4.5ｍ，最大高54cmの掘り方が検出された。このことからは，本住居築造に際しては，３段階が想定できる。まず第１段階に，尾根の高い方から，大まかな平坦面を作り，さらに第２段階で，さらに広く掘り込んで平坦面を作り，その後，北側斜面に寄せて住居掘り方を掘り込んだと考えられる。掘り方は，胴張り隅丸方形を呈し，１辺5.6ｍを測る。壁高は西側で最高値となり64㎝を測る。南壁中央よりやや東側に寄った部分で，長さ２ｍ，幅30㎝の狭小な突出部が検出された。この突出部の床面は，住居床面よりわずかに高く，壁に接して深き１㎝～２cmの溝が検出された。本住居の入口と考えたい。壁溝は，西壁から南壁にかけて検出きれ，幅約30cm，深さ３㎝～７cmを測る。床面からは，小ピットが12カ所で検出された。（Ｐ１～Ｐ12）。この内，位置，規模から，主柱穴はＰ１，Ｐ４，Ｐ７，Ｐ９と考えられる。規模は，径30㎝～40㎝，深さ50㎝～63㎝を測る。床面中央部から，径１ｍ，深さ18cmの円形に近いプランを呈する小土壙が検出された。墳内からは，少量の炭化物とともに黒色土が検出され炉跡と考えられる。壁面には赤変した部分は見られなかった。床面の北側から，長さ2.9ｍ，幅1.9ｍ，深さ22㎝～34cmの方形を呈する土壙を検出した。壙底の縁辺部には，東壁と南壁の一部を除いて溝がめぐらきれており，幅10㎝～15cm，深さ４cm～７㎝を測る。土壙内からはＰ８，Ｐ９，Ｐ10，Ｐ11が検出された。ピットは径24cm～30cm，深さ30cm～50cmを測る。床面から遺物は出土せず，埋土上面から少量の土器片が出土した。本土壙の埋土は褐色土であり，この褐色土上に，本住居床面に見られる黒色土が連続して観察された。このことから，本土壙は，３号住居より古いと考えられ，柱穴，埋土の状態，溝の存在，遺物の出土レベルから考えて，３号住居に先行する小規模な竪穴式住居跡の可能性が考えられよう。

本住居は床面から，黒色土層と少量の炭化物が検出された。このことから，本住居は，火災によって焼失したことが考えられる。しかし，出土した炭化物が少量であることから，葺材を焼失した程度の火災であったと推定されよう。

本住居床面からは，少量であるが，弥生十器片が出土した。これらの土器には，高坏形土器で，口縁端部に波状文をもつもの，円形浮文を貼り付けたものが見られ，他に用途不明の異形土器が含まれている。このような土器は，他の住居からは出土せず，特殊な用途の土器であると想定されよう。このことから，本住居は，祭祀に関係する可能性が考えられよう。

第4号住居跡は，第3号住居の南東側に重複して検出し，尾根のほぼ中央に位置している。掘り方は円形プランを呈し，径5.6ｍを測る。壁高は，両側斜面に寄るに従って減じているが，南端部では消滅している。検出した壁高は，最高で36cmを測る。壁溝は掘り方が消滅する南端部を除いて全体にめぐらされ，幅20cm～30cm，深さ4cm～13cmを測る。床面からは，小ピット9が検出きれた。（Ｐ15～Ｐ23）この内，位置，規模から、主柱穴は，Ｐ16，Ｐ20，Ｐ21，Ｐ23と考えられ，径35cm～50㎝，深さ56㎝～67cmを測る。床面からは，他に3基の小土壙が検出された。（Ｄ１，Ｄ２，Ｄ３）。3基とも断面は袋状を呈している。Ｄ１は開口部径70㎝，最大径80㎝，底径50㎝，深さ79cm，Ｄ２は，開口部径70㎝，最大径75cm，底径50cm，深さ90cm，Ｄ３は，開口部径60cm，最大径65cm，底径45cm.，深さ95cmを測る。埋土内からは少量の土器片が出土した。この3基の小土壙は，小規模ではあるが，形状から，本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。

遺物としては，少量の弥生土器片，鉄器片が出土した。

テラス状遺構（第75図）

本遺構は，第1号住居の東側約5ｍの，1号住居から下ってきた平坦部が，急傾斜となりはじめるあたりで検出した。地山を等高線の形状と合うように掘り込んで狭小な平坦面を造成している。規模は、長さ10ｍ，壁高は最高で69cm，最大幅1.5ｍを測る。床面の中央部あたりで砥石1点が出土した。遺物が少ないため，本遺構の時期，性格については明らかにすることはできない。

大谷古墓（第79図）

第1号住居跡床面の中央部から検出した土壙である。第1号住居跡の埋土を掘り込んで築造しており，掘り方の深さについては確認することはできない。残存する掘り方は、方形プランを呈し，上端部長さ2.2ｍ幅1.3ｍ，下端部長さ2.05ｍ，幅1.1ｍ，深さ18cm～21㎝を測る。主軸はＮ11°30'Ｅをとる。底面はほぼ水平としている。壙底周辺部の，地山直上から鉄釘が15本分出土した。このことから，本土壙内に，本棺を埋置したことが確認きれた。出土した釘の位置から，木棺の規模は，長さ1.6ｍ，幅80㎝と推定される。壙内の南側から，須恵器壷1個体分が，半分に割れた状態で出土した。この須恵器は，地山直上にあり，接して鉄釘が出土していることから，木棺の小口に接して埋置された副葬品であって，上部から転落した角礫のため割れたと考えられる。

外部施設については，調査前の状況からもうかがうことはできず，地山の整形痕も見られないことから，本墳墓は，土壙に木棺を埋置したのみの簡素な墳墓と考えられる。

Ｂ　地　点

本地点は，芳ヵ谷2号古墳の存在する尾根頂部から東側へ分岐した小支尾根に位置している。調査は、尾根中心線に幅1ｍのトレンチを2カ所，先端部に十字のトレンチを設定し，必要に応じて拡張を行なった。

調査の結果，竪穴式住居跡3軒，石棺2基を確認した。住居跡は，尾根の高い方から順次1号，2号，3号とした。石棺については，芳ヵ谷1号古墳の項で述べたように，芳ヵ谷3号古墳とし，大形石棺と小形石棺各1を確認し，大形石棺を第1主体，小形石棺を第2主体とした。

以下，各遺構毎に，概要について述べていくこととする。

第1号住居跡（第80図）

本地点の存在する尾根の基部あたりで検出した竪穴式住居である。検出した掘り方は，円形プランを呈し，

径5.5ｍを測る。地山が尾根先端部に向けてゆるやかに傾斜しており，壁高は，先端部に向けて次第に減じており，南東端に至って消滅している。残存する壁高の最高値は，西側にあり，約50ｍを測る。壁高は，壁に接して全体にめぐらきれており，幅30㎝～40㎝，深さ６㎝～９cmを測る。住居内及びその周辺から小ピットが11カ所検出された。（Ｐ１～Ｐ11）。この内，住居床面内に含まれるのはＰ１～Ｐ９である。これらピットの位置，規模から，主柱穴はＰ１，Ｐ４，Ｐ６，Ｐ８の４ヵ所と考えられる。この４ヵ所のピットは，径25㎝～40cm，深さ40㎝～71cmを測る。柱間は2.1ｍ～2.3ｍを測る。Ｐ４の底面の形状は，２段となっており，Ｐ６は，２本の重複が考えられる形状を呈しているため，本住居は建て替えが行なわれたことが推定きれる。床面中央部から長さ１ｍ，幅最大65㎝，深さ9cm～20cmを測る小土壙が検出された。埋土内からは，黒色土が検出され，焼土面も見られることから，炉跡と考えられる。

住居内からは，壁溝に近い部分から，弥生土器片，角礫が出土し，床面中央に近い部分から，地山から20cm浮いた状態で，用途不明の鉄製品が出土した。

本住居の南東側から，地山を直線状に掘り込んだ平坦面が検出された。この平坦部は，遺物は見られず，小ピットが３ヵ所で検出されたが，建物跡は想定できなかったため，性格は明らかにできない。又，北側からは，長さ約60㎝，幅約30cm，深さ5㎝を測る。短い構が検出された。このあたりから，備前焼の甕を故意に割ったと思われる細片が多数出土した。備前焼とともに炭化物の細片も出土しており，中世墳墓が存在した可能性が考えられる。

第２号住居跡（第81図）

第１号住居の東側約70ｍの尾根斜面より検出した竪穴式住居である。検出した掘り方は，円形プランを呈し，径3.6ｍを測る。壁溝は傾斜面に位置するため，北側に至って次第に減じ，北端部で消滅している。壁高は尾根線側の南端部で最高値をとり，63cmを測る。壁溝は，壁に接して西側と，東側にめぐらされており，幅約20㎝，深き４cm～５cmを測る。床面からは14ヵ所で小ピットが検出された（Ｐ１～Ｐ４）。この内，本住居に伴う主柱穴は，Ｐ１，Ｐ２が考えられる。しかし，Ｐ２については，掘り方壁に重複する位置にあるため，若干疑問は残るが，Ｐ１との対応関係，底面のレベルから考えて，主柱穴と考えられた。Ｐ１は，径25cm，深さ7cm，Ｐ２は径35㎝，深さ15㎝を測る。底面のレベルは，ほぼ一致している。住居内からは，少量の弥生土器片，角礫が出土した。

第３号住居跡（第82図）

第２号住居跡の東側約15ｍより検出した竪穴式住居跡である。芳ヵ谷３号古墳の調査を行なったところ発見したものである。この部分は造成区域外にあたるため，最底限の調査にとどめたため，全体は検出していない。調査終了後，埋め戻しを行い，保存されている。

試掘調査で，大形石棺を確認していたため，墳丘等の外部施設の確認のため十字形のトレンチを設定したところ，各区域内から掘り方を検出することができた。検出した掘り方から，本住居は方形又は隅丸万形のプランを呈すると考えられ１辺６ｍと推定される。検出した壁は最高で50cmを測るが，尾根中心線より若干北側斜面によっているため，北壁は，わずかに高さ１㎝を測るにすぎない。南側トレンチから検出した掘り方は，２段となる部分が見られる。検出した狭小な平坦面は，長さ約80cm，幅20㎝を測る。この平坦部はトレンチ外へ連続しているため，全体が把握できないが，Ａ地点２号住居に類似した遺構と推定され，木住居の人口にある部分の可能性も考えられよう。床面からは，３ヵ所で小ピットが検出された。このピットは本住居の主柱穴と考えられ，その配置関係から本住居は４本柱と推定される。柱穴の規模は，径35cm～40cm，深さ56㎝～61cmを測り，底面のレベルはほぼ一致している。

本住居は，床面からの炭火材が出土した。とくに北トレンチからは、多量に出土しており床面上には，黒

色土が厚く推積していた。このことから本住居跡は火災をうけたことが確認された。炭化材は，北半分にとくに集中して見られることから，北半がとくに火勢が強かったと推定きれるが，ほぼ全焼の状態であったと思われる。調査が部分的であるため，上層構造については推定することは困難であるが，北トレンチからの炭化材の状態は，掘り方に対して直交するように検出されている。

住居内からは，南トレンチ内の狭小な平坦面から完形の小形鉢形土器１点が出土した他，少量の弥生土器片が出土した。

芳ヵ谷２号古墳（第83図）

本古墳は，Ａ地点４号住居跡より南東約50ｍの尾根頂部の斜面寄りに検出した。試掘調査時にその存在が確認されていたものである。周辺の地形観察からは，古墳の存在が推定される高まり，溝等は一切見られず，周辺に設定したトレンチ内からも地山整形痕は検出されなかった。従って，本古墳の外部施設は設けられなかったと考えられる。

主体部は，小形の箱式石棺である。石棺は，尾根線に対して直交する方向に構築されている。地山を，長さ1.35ｍ，幅45cm～75㎝，深さ最大27㎝に掘り込んで墓壙としている。墓壙は両小口が丸みをもって掘り込まれており，小口石を据えるため，棺床面より６㎝～10㎝程度低く掘り込んでいる。両側壁も，側石を据えるため，棺床面より４㎝～９㎝低く掘り込んでいる。石棺は，この掘り方のほぼ一杯に構築しており，内法は，上端で102cm，下端で83㎝，幅東側小口20㎝，西側小口10cmを測り，東側に向けて開く構造とし，主軸はＮ58°Ｅをとる。東側小口は，長さ35㎝，幅27㎝，厚さ7cm西側小口は，長さ25cm，幅10cm，厚さ11㎝の石材を各１枚づつ使用している。西側壁は各２枚づつの板状の石材を使用しており，長さ36cm～65㎝，幅25㎝～30㎝，厚さ３㎝～８㎝を測る。小口，側壁とも石材は，上部に向けて開く構造となっており，側壁が小口を狭む構造としている。主要な蓋石は，３枚使用しており，西側は，２枚を重ねている。石材は長さ31㎝～68㎝，幅46㎝～60cm，厚さ８㎝～13cmを測る。蓋石を構架した後，東側の蓋石に北側から長さ40cm，幅26㎝，厚さ11㎝の板状の石材を１枚かけている。頭位は，石棺が東側に向かって開くこと，東側がていねいにつくられていることから，東側と考えられる。規模から小児用と考えられるロ棺内及び棺の周辺からは遺物は出土しなかった。

芳ヵ谷３号古墳（第82図）

大谷Ｂ地点の存在する尾根の先端部にあり，３号住居と重複している。調査前の地形は、尾根が若干平坦となっているのみであった。この尾根上から，試掘調査の際，大形石棺１基が検出きれており，この平坦面全体が古墳の範囲と推定されたが外形観察では，墳丘の存在は確認することはできなかった。このため，石棺の調査と，範囲確認のため，石棺を中心に，四方に幅１ｍのトレンチを十字に設定し，一部拡張を行なった。既に述べたように，本古墳は，造成区域外にあるため，調査区は最低限とした。

外観からは，墳丘存在は確認できなかったが，断面観察から４方のトレンチの端部に近い位置に，墳丘裾と考えられる土層が見られるとともに，北側を除く３方の３号住居掘り方の外側に，地山を整形した痕跡が観察された。従って，本古墳は，３号住居が埋設した後に，３号住居の周囲の地山を削平して，墳形を整えた後，墳丘を盛ったものと考えられる。３号住居内の埋土に攪乱が見られないことから，裾まわりを整形した後，墳丘を盛ったと考えられる。トレンチ断面で見られる墳裾と考えられる部分から推定して本古墳は東西10ｍ，南北７ｍの規模と考えられる。墳形は，明らかにはできないが，方形又は，だ円形を呈すると考えられる。墳丘の高さは，現存高で１ｍ前後と推定されるが，墳裾の傾斜から元来は若千高かったと考えられる。

古墳の範囲からは，主体部が２基検出された。１基は大形石棺で，他の１基は小形石棺である。大形石棺

はほぼ中央に位置することから第１主体とし，小形石棺を第２主体とした。

第１主体部（第84図）

本古墳の中央よりやや北東側に寄って検出した大形の箱式石棺である。蓋石は現地表下約80cmから検出した。石棺の掘り方は，大部分３号住居内にあって，明瞭に検出することはできなかったが，東側小口の部分は３号住居東壁外にまで掘り込まれており，トレンチ壁には，掘り方と考えられる土層変化が見られたため，掘り方は，２重土壙としており墳丘構築後掘り込まれたことが確認された。１次壙の掘り方の全体は検出することはできなかったが，東側小口が残存していること，東北壁南壁，底面の一部が検出きれたこと，後述する粘土の分布状態等から，掘り方の規模は，下端で長さ2.9ｍ，幅1.7ｍと推定され，上端は，東側小口の形状を手がかりとして推定すれば，長き3.5ｍ，幅1.9ｍと惟定されよう。深さは，東側小口で40㎝，石棺中央部あたりで１ｍ弱と推定される。２次壙は，１次壙のほぼ中央部に，設けており，１次壙床面を15㎝程掘り下げて棺床面としいる。２次壙の規模は，全体を検出していないため，明確ではないが，南側で検出した部分から推定して，長さ2.2ｍ，幅90cm前後と推定される。石棺は，この２次壙の壁よりやや内側に寄せて構築しており，内法は，長さ1.75ｍ，東側小口幅42cm，西側小口幅33cm，深さは東側小口で33cm，西側小ロで31㎝を測り，棺床面はほぼ水平となっており，主軸はＮ57°30′Ｅをとる。石材は，小口で各１枚，両側壁で各４枚の石材を使用し，構築に際して，棺床面よりわずかに深く据えている。石材の検出状況から，構築は，東側小口→北側壁→西側小口→南側壁の順に構築し，最後に東側小ロと南側壁とのすき間に小角礫をつめて調整している。蓋石は４枚の石材を構築している。蓋石は頭位に寄る程大きな石材を使用しており，頭位側の蓋石は75㎝×90cm，厚さ20～25cmの大形のものを使用している。西側の蓋石は，棺外にあたり，外見上蓋石に見えるが，蓋石としては，有効ではなく，蓋石以外の目的で配したと推定されるが，明瞭ではない。東側の蓋石のすき間には，小角礫がつめられていた。石棺の周囲から多量の茶褐色の粒土が検出された。使用した粘土はあまり粘性をもたず，良質ではない。粘土の下側からはマサ土が検出きれたことから、石棺構築後，２次壙内にマサ土をつめて安定をはかった後，石棺全体をおおうように粘土をまいたものと考えられる。粘土は，蓋石上で厚き約10㎝を測る。

側壁，小ロの上部約1/3程度と，蓋石の裏側に，棺の内法幅にあたる範囲に朱の塗付が認められた。朱の塗付の状態から，死者の埋葬後塗付を行なったものと考えられる。

棺内からは，頭位を東側に向けて人骨１体分が出土した。残存する人骨は，頭骨がほぼ全体，他は部分的に残存するにすぎない。頭骨にはわずかではあるが，朱の塗付が認められた。他の部分からは見られないため頭部のみに朱の塗付が行なわれたものと考えられる。人骨の分析から壮年の女性と考えられる（洋細は別項参照）

人骨の他，遺物は出土しなかった。

第２主体（第85図）

第１主体の西側約４ｍから検出した小形の箱式石棺である。３号住居跡掘り方外の直近に位置している。墓壙は，不整形なくさび状の形状を呈しており，長さ1.2ｍ，最大幅60cm，深さは，北側小口部で34cm、南側小口部で20㎝を測る。石棺は下端にほぼ接して構築しており，内法は長さ59cm，幅は北側小口で15cm，南側小口で13㎝，深さは北側小口で21cm，南側18cmを測り，主軸はＮ25°Ｗをとる。石材は，両小口各１枚，東側壁２枚，西側壁３枚の石材を使用しているが，石材の規模は均一ではない。蓋石と考えられる石材は，３枚確認された。北側石材に重なって検出されたが，上側の石材は浮いた状態で検出されており蓋石と考えにくい。従って，蓋右は２枚と考えられる。南側の蓋石は，西側にずれて検出された。この石棺はその規模から小児用と推定される。

棺内からは，遺物は出土しなかった。

本主体は，南側の蓋石が動いているものの，他の部位は完存しているといえる。この石棺の西側60㎝あたりに，本古墳の墳裾が想定され，古墳の裾部に位置しているといえよう。このことは，墳丘構築後，構築したと考えられ，このことから，本石棺は，第1主体構築より後出と考えられよう。

（3）検　出　の　遺　物

調査の結果，遺構内及びその周辺から，それ程多量とは言えないが，弥生土器の外，鉄製品，石鏃，土製勾玉，須恵器，備前焼などが出土した。量的にはA地点の方が多く出土している。出土した土器類の大部分は破片の状態であり，器形のうかがえるものは少量であった。

以下，各遺物について，その概要を述べていきたい。

弥生土器（第86～89図）

本遺跡から出土した弥生土器は，A・B両地点の住居跡内及びその周辺に集中して出土したが，A地点の方が量的に多く出土している。A地点では，とくに3・4号住居内及び埋土から集中して出土した。器種については，壷形土器，甕形土器が多いが，高坏が目立つ点が特徴的である。

壷形土器，甕形土器の特徴は，「くの字」状に外反する口縁部の端部は，器厚を減じ平たくおさめることが指摘できる。底部は平底である。鉢形土器は，口縁部の端部は，器厚を減じて丸くおさめており，底部は，平底，丸底が見られる。高坏は，破片の状態で出土しており，全体の器形を明らかにすることはできないが，口縁端部に波状文，凹線文をめぐらせたもの，円形浮文，粘土ひもを貼り付けたものが見られ，特異な土器を想定きせる。成形技法の点からは，甕形土器，壷形土器は，内面ヘラ削リ後ナデ調整を施し，外面はハケ目調整を施しており，他の2遺跡と技法的には共通しているといえよう。

B地点は，ほとんど住居内から出土している。器種は甕形土器，壷形土器，鉢形土器にかぎられる。形態の特徴は，A地点と類似しているが，口縁部の器厚が，A地点の土器と比して，やや薄くなるようである。底部の破片の内，尖底となるものが1点見られた。器種は不明であるが，他に例が見られない形態を示している。成形技法からは，A地点と類似している。

各個別の土器説明は，観察表とする。

須　恵　器（第87図18）

A地点第1号住居内の大谷古墓から出土した壷形土器である。口径6.O㎝，器高16.0㎝を測る。胴部は円筒形を呈し，底部から肩部まで同径である。口縁部は短く，外反しつつ端部でわずかに拡張し平たくおさめる。口縁部はミズヒキ調整，胴部内面はナデ整形，外面は整形後ミズヒキ調整を行っている。底面は糸切りである。切り離しの際の粘土を上方へナデ上げている。胎土良好で，焼成は堅緻である。内外面とも灰白色を呈する。

石　　鏃（第90図）

A地点第2号住居跡南側斜面から出土した安山岩製の石鏃である。柳葉形を呈し，長き3.8cm，最大幅1.2cm，最大厚0.4cmを測る。刃部は全面に施されている。両面から細かい調整が行われている。

砥　　石（第91図1～5）

1は，A地点テラス状遺構から出土した完形品である。広口面の両面と小口面1面に使用痕が認められる。長さ7.5cm，幅4.7cm，厚さ1.8cmを測る。砂岩製である。2は，A地点2号住居西側の斜面から出土した。1部欠失している。長辺の広口のみに使用痕が児られる。現存長12.4㎝，最大幅3.1㎝，現存最大幅1.5㎝を測る。粘板岩製である。3は，B地点から出土した。広口面に使用痕が見られる。長さ7.4cm，幅5.8cm，

最大厚3.9㎝を測る。半花崗岩製と思われる。4は，A地点3号住居内から出土した小型の完形品である。全面に使用痕が見られ，使用による磨滅が著しい。長さ5.1㎝，最大幅2.0㎝を測る。短軸断面は三角形を呈し，最大厚1㎝を測る。粘板岩製と思われる。5は，A地点第3号住居跡から出土した小形の完形品である。長辺の4面に使用痕が見られる。長さ2.1㎝，幅1.0㎝，厚き0.5㎝を測る。粘板製と思われる。

鉄　製　品（第92図1～16）

1は、芳ヵ谷3号古墳墳丘内から出土した鉄鏃である。無茎式三角形鏃に属し，平造りである。基部の腸抉はゆるやかな曲線を描いている。長さ5.7㎝，基部幅3.0㎝を測る。2は，A地点3号住居内から出土した?である。茎部を欠失している、現存長6.8cm，刃部最大幅1.2㎝，刃部長2.2㎝を測る。刃部は，断面三日月状を呈し，先端部がゆるやかに反っている。3は，A地点3号住居内から出土した?である。刃部と茎部が折損して出土し，茎部は欠失しており，全長は不明である。刃部側は，現存長3㎝，刃部長さ1㎝，幅1.2cmを測る。刃部は断面三日月状を呈し，先端部は直線的に反っている。4は，A地点2号住居内埋土中から出土した完形の小形鉄斧である。全長4.6cm，刃部はゆるやかに弧を描いており，幅2.6cmを測る。袋部は両側から折り返しており，長径2㎝，短径1.3㎝の楕円形を呈している。5は，A地点第4号住居跡内から出土した用途不明の鉄製品である。先端部は鋭角的となっており，この部分の刃部と考えれば，鉄斧の破片と考えることもできよう。現存長4.9㎝，最大幅2.1cm，最大厚1.4㎝を測る。6は，B地点第1号住居跡埋土内から出土した用途不明の鉄製品である。長さ11.6㎝，最大幅1.8cmを測る。断面は方形を呈し，厚さ0.4cmを測る。7は，A地点4号住居埋土内から出土した鍬先と考えられるものである。刃部中央をわずかに欠失しているがほぼ完形品である。全長3.5㎝，幅5.6cm，最大厚0.25cmを測る。刃部長は5.6cmを測る。基部を両側からわずかに曲げている。8～16は，大谷古墓より出土した鉄釘の破片である。完形品は出土しておらず全形を確認することはできない。埋葬された木棺に使用した釘と考えられる。断面方形を呈する。

土製勾玉（第93図1～4）

A・B両地点から出土したもので，破片の状態であるが，形状から勾玉と考えられる。1は，B地点から出土した勾玉の頭部である。頭部先端は平坦としており，現存長2.9cm，幅2.3㎝，厚さ1.7cmを測る。頭部はわずかに凹んでおり丁字を意識したものか，孔は片側から成形時に穿孔されており径5.5mmを測る。胎土は良好であるが，焼成は軟調である。2は，1と同地点より出土した勾玉の頭部である。頭部は平坦としており，現存長2.8㎝，幅1.8㎝，厚さ1.6cmを測る。孔は，片側から穿孔しており径5.5㎜を測る。胎土は良好であるが，焼成は軟調である。3は，3・4号住居埋土から出土した勾玉の下半部である。現存長5.5㎝，最大幅2.8cm，最大厚2.3㎝を測る。製作はていねいで全面にヘラナデ痕が見られ，焼成は堅緻である。4は，1，2と同じ地点から出土した先端部であるが，先端部と下半部を欠失している。現存長2.4㎝，幅1.6cm，厚さ1.6㎝を測る。断面は円形を呈し，欠失した先端部に孔の一部が残存しており，推定5.5㎜の孔をあけたと思われる。胎土は良好であるが，焼成は軟調である。

（4）小　　結

調査の結果，本遺跡からは，弥生時代の竪穴式住居跡7軒，古墳2基，及び古墓1を確認した。

竪穴式住居跡は，位置関係から2グループに分けられ，A地点，B地点とした。A地点からは4軒分を検出した。第1号住居跡は，だ円形プランを呈し，尾根上傾斜面に位置し，掘り方の約1/3が消滅している。第2号住居跡は隅丸方形プランを呈し，尾根斜面に位置し，掘り方の半ばは消滅している。消滅している部分は盛り土としたと考えられる。第3・4号住居跡は尾根鞍部に位置し，掘り方の一部を重複して検出した。

既述のように，新旧関係については，第３号住居跡の方が古いことが確認された。第３号住居跡は，尾根鞍部を削平して平坦部を造成した後その平坦面を掘り込んで築造している。平面形は隅丸方形プランを呈している。住居内からは多量の黒色土と少量の炭化物が出土した。このことから，本住居跡は焼失したと考えられる。本住居跡内からは，他の住居と比して比較的多くの土器が出土した。大部分は細片のため，全体の器形を図示することはできないが，高坏形土器、異形土器が含まれていた。この高坏形土器は，口縁端部のみが数点出土している。その特徴は，口縁端部に波状紋をめぐらせ，円板又は粘土ひもを貼り付けるものも含まれている。異形土器は把手形土器と考えられるが，類例がないため判断はできない。しかし，これらの土器は，日常雑器とは性格を異にしていると考えられ，住居跡内で祭祀を行ったと考えることも可能であろう。埋土内から土製勾玉が出土していることもその裏付けとなるであろう。第４号住居跡は円形プランを呈し，掘り方の一部を３号住居跡と重複している。住居床面からは，柱穴と類似する位置から，小規模な袋状土壙を３基検出した。形状から貯蔵穴と考えられる。住居内に貯蔵穴と設ける例は他にも見られるが，１基を設けるのが通例であって，本例のように小規模なものを複数設ける例は見られない。貯蔵する内容によって使い分けしたものかもしれない。

本地点の住居跡は，第３号住居跡，第４号住居跡が重複することから明らかなように，新旧関係があることは確実である。しかし，１号住居跡，２号住居跡，４号住居跡からは，少量の土器しか出土していないため，全体の新旧関係について判断することは若千困難であるが，周辺から出土した土器を参考にすると次のように考えることができる。第２号住居跡，第３号住居跡は同一時期に営まれ，その後４号住居が営まれたと考えられる。第１号住居跡はいすれか判断できない。これら住居跡の営まれた時期については、出土した土器から，弥生時代後期後半に比定できよう。即ち，Ａ地点は短期間に営まれた集落といえよう。

Ｂ地点は，尾根上に３軒検出した。第１号住居跡は，円形プランを呈し，尾根上から検出した。地山が傾斜しているため，掘り方の約 1/3 が消滅している。第２号住居跡は，円形プランを呈し，尾根中心線からややはずれて検出きれた。第３号住居跡は，計画区域外に位置するため，全体は明らかにすることはできないが，検出した掘り方から推定して隅丸方形プランを呈する考えられる。掘り方内からは多量の炭化物，黒色土が出土しており，焼失したことが確認された。これらの住居跡は出土した土器が少量であるため，新旧関係について判断するには若干困難はあるが，少量であるが出土した土器から考えて，３軒が同一時期に営まれたと考えられ，弥生時代後期後半に比定できよう。

さて，Ｂ地点第１号住居跡の上方から，尾根を削平して平坦面とした部分が検出された。建物跡は確認されなかったが，遺物が出土したことから，何らかに利用したと考えられる。遺物が少量であるため、利用目的について判断することは困難であるが，土製勾玉が含まれていることから、祭祀に使用したと考えることが可能であろう。

芳ヵ谷第２号古墳は，小形の幼児用と考えられる石棺である。外部施設は検出されず，本来設けられなかったと考えられる。遺物は皆無であり，時期については明らかにできない。芳ヵ谷第３号古墳は，尾根の高い方を削平して墓域としており，他の部分は地山整形を行って，墳丘を盛ったと考えられる。ただ整形は墳裾部に限られており，重複して検出された第３号住居跡は完存している。本古墳は，調査区域外であって，トレンチによる調査を行ったため，不明の点は残されているが，検出した墳据から考えて，長辺 10ｍ前後，短辺８ｍ前後の規模をもつだ円形又は方形を呈する古墳と考えられる。墳丘の高さは，墳丘が流失しているため不明であるが，残存した部分から考えて１ｍ前後と考えられ，それほど高くないと考えられる。主体部は２基検出した。第１主体は，大形石棺で墓壙は第３号住居跡の壁と重複している。石棺は，全体を粘土で被覆しており，内面は朱を塗付している。棺内からは、蚊位を巣に向けて熟年女性の人骨１体が出土した。頭骨には

朱が塗付されている。第２主体は，墳丘裾部から検出した小形の幼児用の石棺である。検出した位置は，墳裾の地山整形面にあたる部分であるにもかかわらず，破壊をうけていないところから，第１主体より後出と考えられる。本古墳からの遺物は，表土から無茎鉄鏃１点が出土したのみであるため，時期については明確にはできないが，尾根先端部に位置することから，前半期の特徴を示していると考えられ，主体部の造りから考えて，５世紀代として大過ないであろう。

大谷古墓は，Ａ地点第１号住居内から検出した。住居内埋土を掘り込んで墓壙として，内部に木棺を埋置したことが確認された。周辺には外部施設は見られず、盛り土状の高まりも見られなかったことから，土壙のみの簡素なものであると考えられる。壙内からは，須恵器壷１点が出土した。出土状態から，木棺外の小口部に接して埋置したと考えられる。築造年代は，出土した須恵器から推定して８世紀代と考えられよう。

附表　　大谷井関出土土器観察表　　単位　cm

図面№	出土地点	器　種	法　　量	形態の特徴	手法の特徴	備　　考
第86図 1	A 3号住居	甕	口径　14.9 推定器高 21.0	口縁部は「くの字」状に外反し，端部は平たくおさめる。	内面　口縁部はヨコナデ 胴部はヘラ削りの後ナデ 外面　口縁部はヨコナデ 胴部はハケ目調整	胎土良好 焼成良好 橙色 胴部下半にスス付着
2	A 3号住居	鉢	口径　15.6 器高　9.7 ～8.2	器厚を減じつつ外上方へ向かう口縁部を内傾させた後，端部をわずかに外反させ端部は丸くおさめる。	内面　口縁部はヨコナデ 胴部はナデ調整 外面　口縁部はヨコナデ 胴部以下はヘラナデ	胎土良好 焼成若干軟調 橙色
3	A 3号住居	鉢	口径　8.7 器高　6.4 ～6.05	器厚を減じつつ立ち上がる口縁部端部は丸くおさめる。	内面　ヘラ削り後ナデ 底部は棒状工具により押え 外面　ヘラナデ 口縁部端部はヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
4	A 3号住居	壷	口径　6.8	複合口縁部の弧状に屈曲する施文帯にあたる部分である。	内面　ヘラナデ 端部はヨコナデ 外面　上半部はヨコナデ 後上半部に２条の凹縁をめぐらしその下側に径６㎜の竹管文をめぐらせる。 接合の際の押しつけ痕が紋様状に下端に残存	胎土良好 焼成良好 暗褐色
5	A 3号住居	高坏	現存高　4.2	高坏脚部の破片である。	内面　しぼり成形 中央部は押さえ 外面　クシ歯状工具による調整後，ナデ	胎土良好 焼成良好 橙色 坏部さし込み技法をとっている。
6	A 3号住居	蓋(?)	底径　19.2 推定器高 11.2	「ハの字」状に開く台部に卵状の把手(?)を接合している。 蓋形土器か。	内面　台部はハケ目調整後，ナデ 把手部，手づくねによる整形後，外面から穿孔 外面　全面ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 橙色 把手部に外面から穿孔し，残存部で９ヵ所見られる。

単位　cm

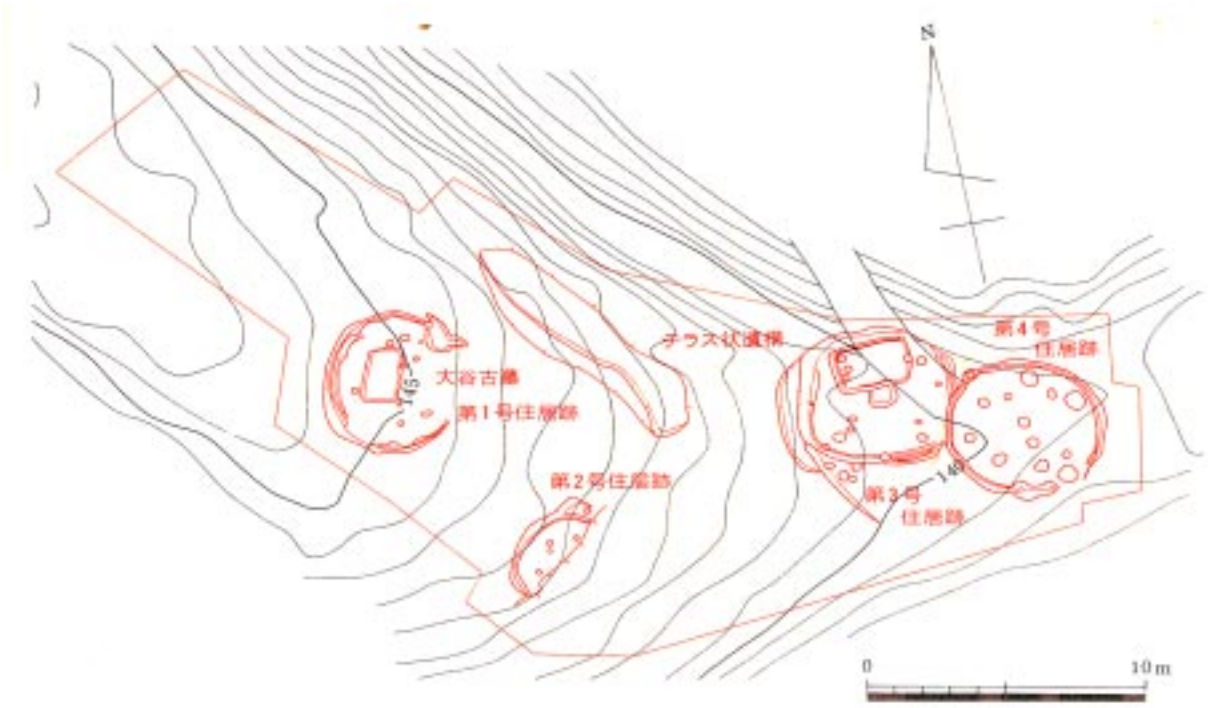
図面№	出土地点	器　種	法　　量	形態の特徴	手法の特徴	備　　考
7	A Ｎ１区	壷	口径　14.2 推定器高 14.8	「くの字」状に外反する短い口縁部の端部はわずかに下方に拡張し平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り後，ナデ 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整後，ナデ 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
8	A ３号住居	高坏	底径　23.2	高坏の脚端部である。端部に４条の波状文をめぐらせる。	内面　ナデ調整 外面　ナデ調整 端部はヨコナデ後，４条の波状文	胎土良好 焼成良好 橙褐色
9	A Ｓ１区 表　土	鉢	口径　15.6 器高　9.1	器厚をわずかに感じつつ外上方へ立ち上がる口縁端部は平たくおさめる。	内面　ヘラ削り後ナデ 外面　ハケ目調整後ナデ 口縁端部はヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
10	A Ｎ１区	壷	口径　13.7	ゆるく外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面　口縁部　ヨコナデ 胴部　ヘラ削り後ナデ 外面　口縁部　ヨコナデ 胴部　ハケ目調整	胎土良好 焼成若干軟調 赤褐色
11	A Ｓ１区	甕	口径　17.0	「Ｌ字」状に屈曲する口縁部の端部はわずかに上方へ拡張している。	内面　口縁部　ヨコナデ 頸部　ヘラナデ 外面　口縁端部ヨコナデ 口縁部　ヘラナデ 以下不明	胎土良好 焼成良好 橙褐色 頸部に接合痕が見られる。スス付着
12	A ３号住居	高坏	口径　22.1	高坏の坏部の破片である。端部は上下にわずかに拡張する。	内面　ヘラナデ 端部はヨコナデ 外面　磨滅のため不明	胎土良好 焼成良好 橙色 口縁端部に不明瞭な４条の波状文をめぐらせ径1.1㎝の円板をはり付ける。円板には中央に１ヵ所，それをとりまくように６ヵ所の刺突がめぐらされている。

単位　cm

図面№	出土地点	器　種	法　　量	形態の特徴	手法の特徴	備　　考
第87図 13	A N１区	壷	口径　8.2 器高 17.2～16.7	卵状を呈する体部から立ち上がる口縁部はゆるく外反し端部は平たくおさめる。	内面　胴部　ヘラ削り後ナデ，底面は棒状工具による押え 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整後ヘラ研磨 底面　ヘラナデ 口縁部　ハケ目調整後ヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 淡橙色
14	A N１区	甕	口径　14.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめ，１条の凹線をめぐらせる。	内面　胴部　ヘラ削り後ナデ 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ナデ 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色 胴部にスス付着
15	A N１区	甕	口径　15.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整 頸部屈曲部１㎝下方に「ノの字」状の押し引き文。 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙色 スス付着
16	A S１区	甕	口径　13.0	「くの字」状の短い口縁部の端部は平たくおさめる。	内面　胴部　ヘラ削り後，粗いナデ 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　クシ歯状工具による調整後，「ノの字」状の刻み 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色 スス付着
17	A S１区	甕	口径　14.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は器厚を減じ平たくおさめる。	内面　胴部　ヘラナデ 口縁部　ヘラナデ 外面　胴部　ハケ目調整後ナデ，クシ歯状工具による「ノの字」状の刻みをめぐらせる。 口縁部　ヘラナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色 スス付着
第88図 1	B １号住居	壷	口径　11.0 器高　13.1	「くの字」状の短い口縁部は器厚を減じつつ端部は平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　最大径より下半はヘラナデ，口縁部から最大径までヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗褐色 ヘラナデの痕跡が顕著でヘラ原体は1.5㎝の幅をもつ。

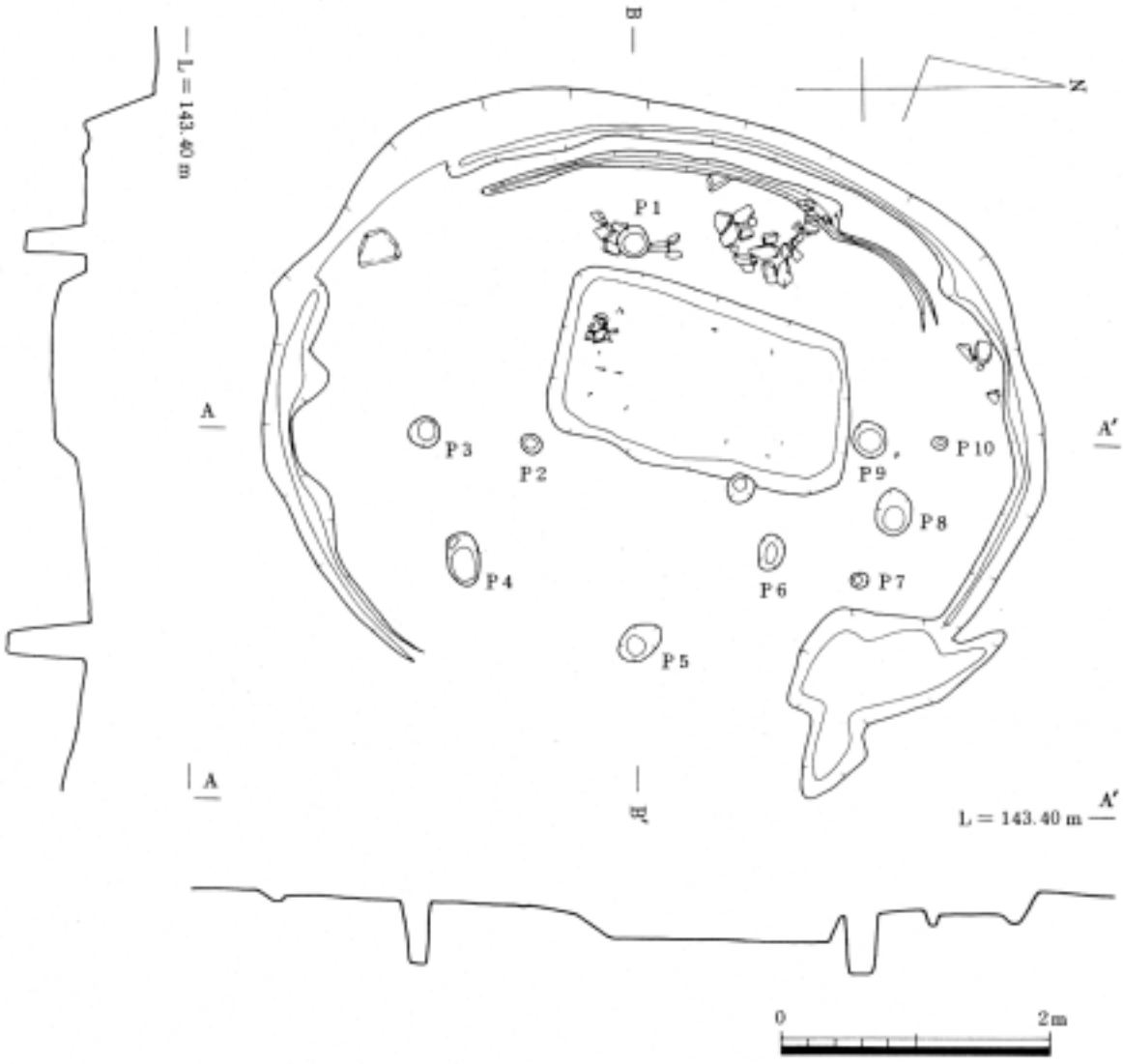
単位　cm

図面№	出土地点	器　種	法　　量	形 態 の 特 徴	手　法　の　特　徴	備　　考
2	B ２号住居	壷	口径　15.6	「くの字」状の口縁部の端部は平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色
3	B １号住居	甕	口径　14.0	外反する口縁部は器厚を減じつつ端部は平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ヘラナデ 口縁部　ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗褐色 成形は粗雑である。
4	B １号住居	甕	口径　9.9	「くの字」状の外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整後ナデ 口縁部　ヨコナデ	胎土石英粒多し。 焼成良好 外面橙色 内面黒色
5	B １号住居	壷	口径　18.2	壷の口縁部である。外反する口縁部の端部は平たくおさめ，２条の凹線をめぐらせている。	内面　クシ歯状工具による調整後ナデ 外面　ナデ調整 口縁端部はヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
6	B ３号住居	鉢	口径　7.6 器高　4.8	手づくね土器である。外上方へ延びる口縁部の端部は鋭くおさめている。	内面　成形後ナデ 口縁部　ヨコナデ 外面　ヘラ状工具によるナデ	胎土良好 焼成良好 橙色 口縁部にわずかにスス付着
7	B １Ｔ１区	甕	口径　10.4	「くの字」状に外反する短い口縁部の端部は平たくおさめている。	内面　胴部　ヘラ削り後，ナデ 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ハケ目調整，部分的にナデ 口縁部　ヨコナデ 口縁端部に１条の凹線	胎土良好 焼成良好 暗褐色 スス付着
8	B １Ｔ１区	不明	不明 現存高　3.7	尖底土器の底部である。	内面　ナデ調整 外面　ハケ目調整後，ヘラナデ	胎土良好 焼成良好 褐色
第89図 9	B ２Ｔ２区	壷	現存高　29.5	口縁部を欠失している。 底部は凸底気味である。	内面　胴部　ヘラ削り 口縁部　ヨコナデ 外面　胴部　ヘラナデ 口縁部　ヨコナデ 底部に接合痕がみられる。	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
10	B ２Ｔ２区	不明	底径　4.4	底部の破片である。	内面　ヘラ削り 外面　ハケ目調整後，ナデ	胎土良好 焼成良好 赤褐色

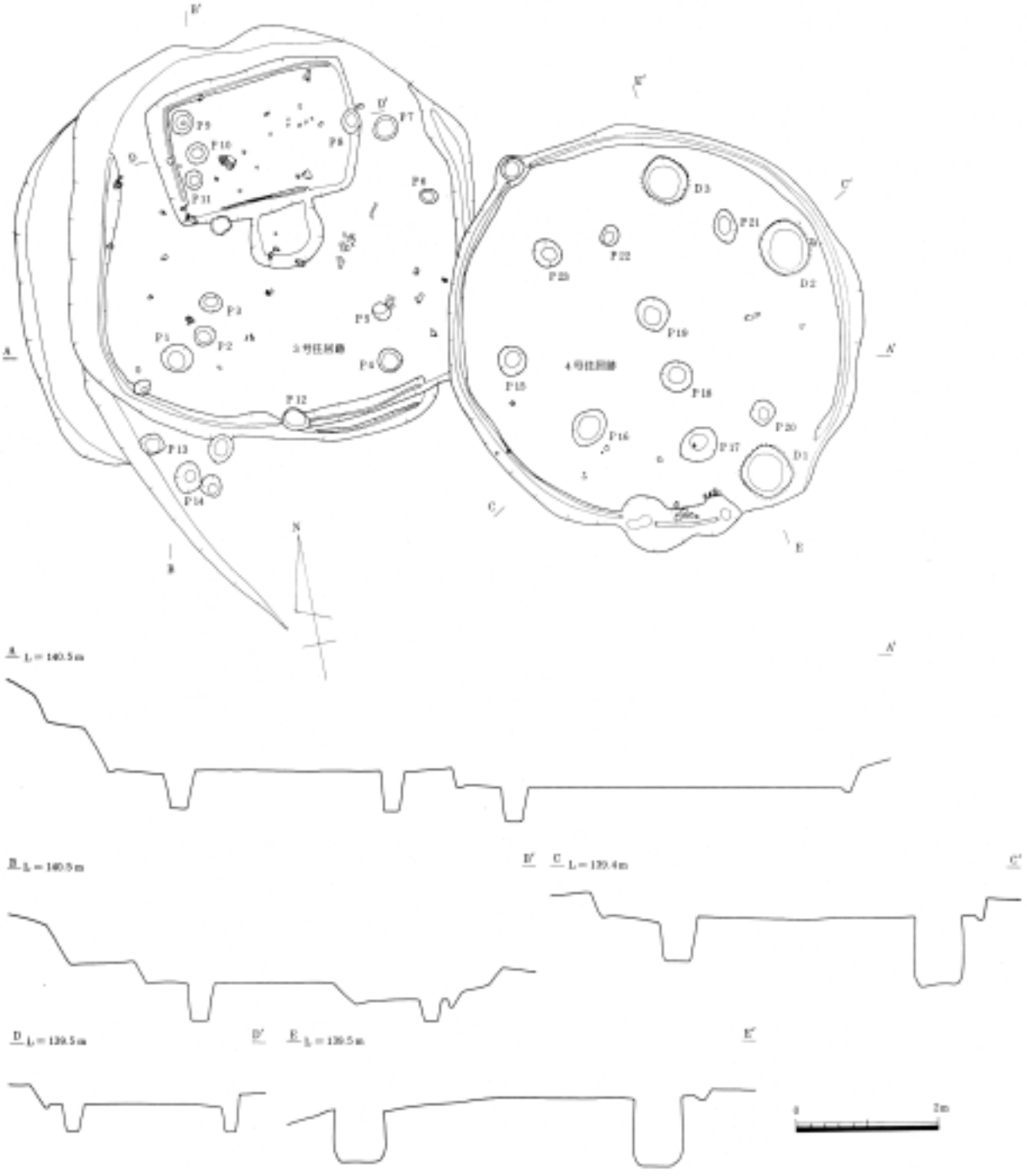


第 75 図　大谷遺跡Ａ地点遺構配置図

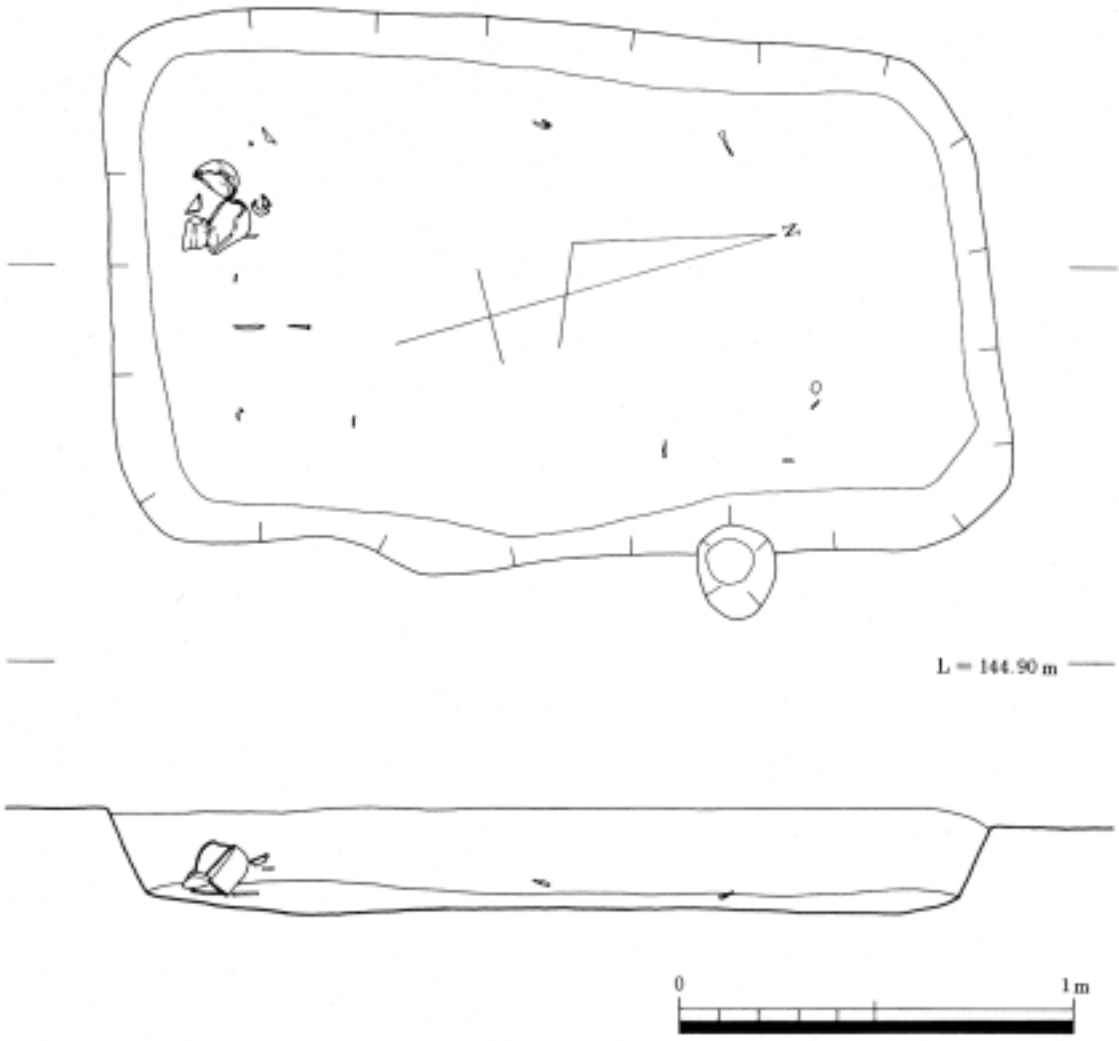
第 77 図　大谷遺跡Ａ地点第 2 号住居跡実測図



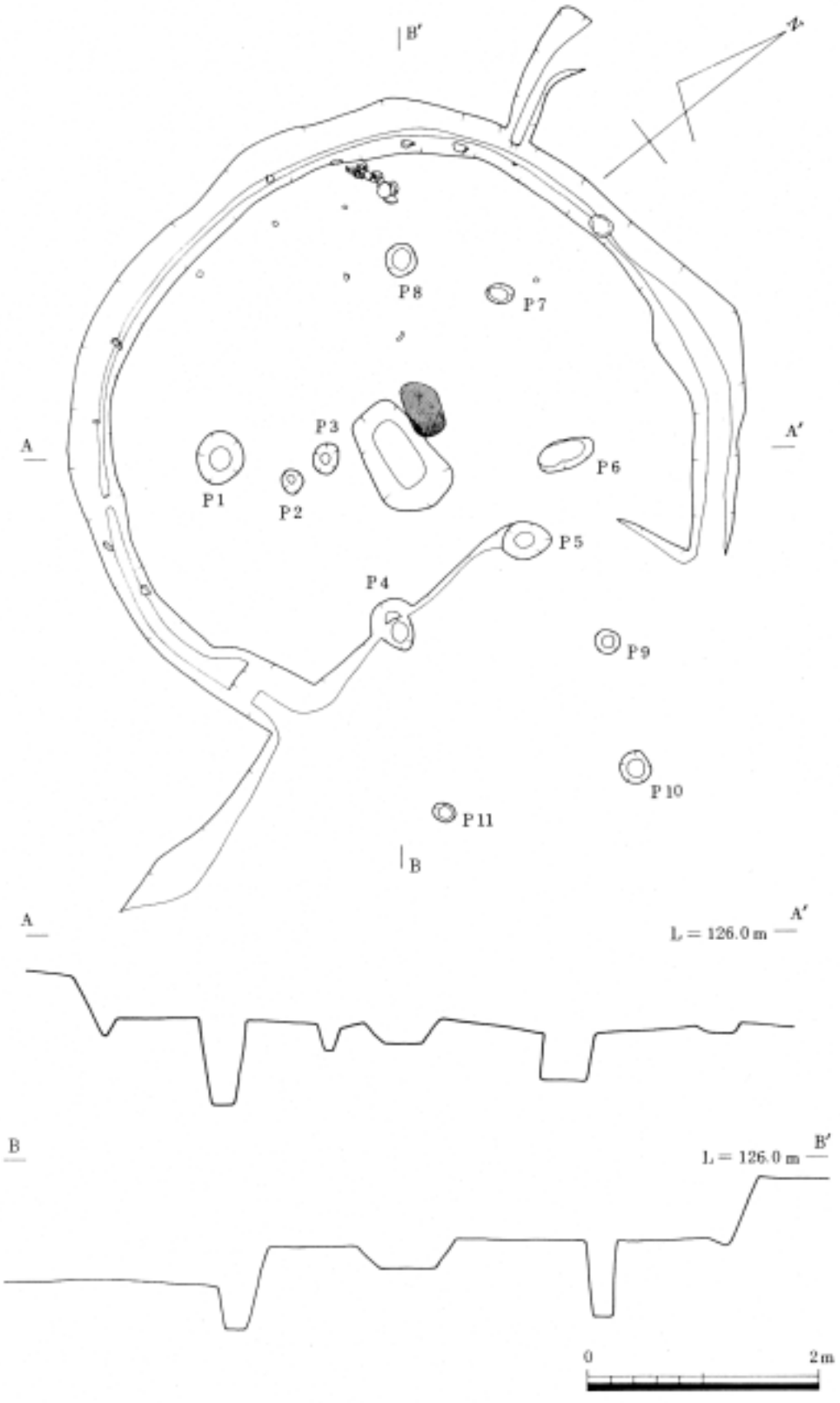
第 76 図　大谷遺跡Ａ地点第 1 号住居跡実測図



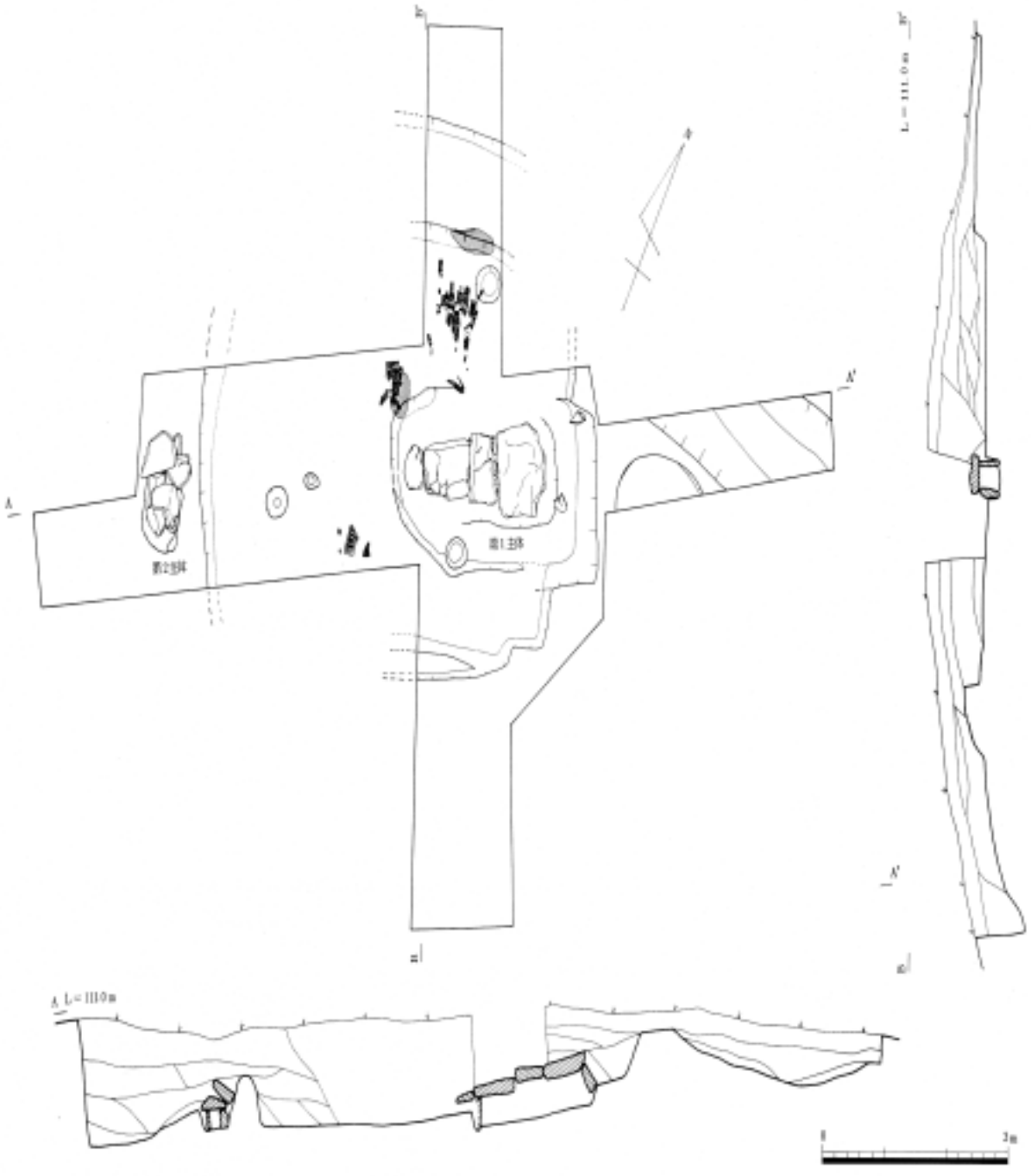
第 78 図　大谷遺跡Ａ地点第３・４号住居跡実測図



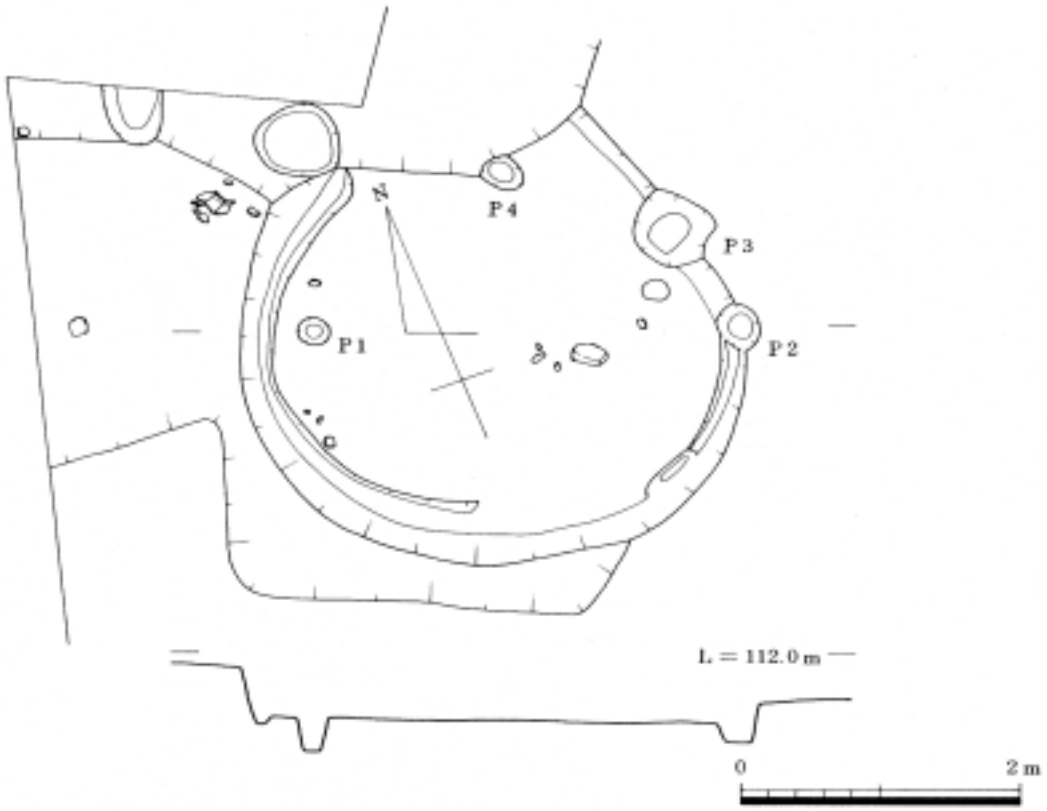
第 79 図　大谷古墓実測図



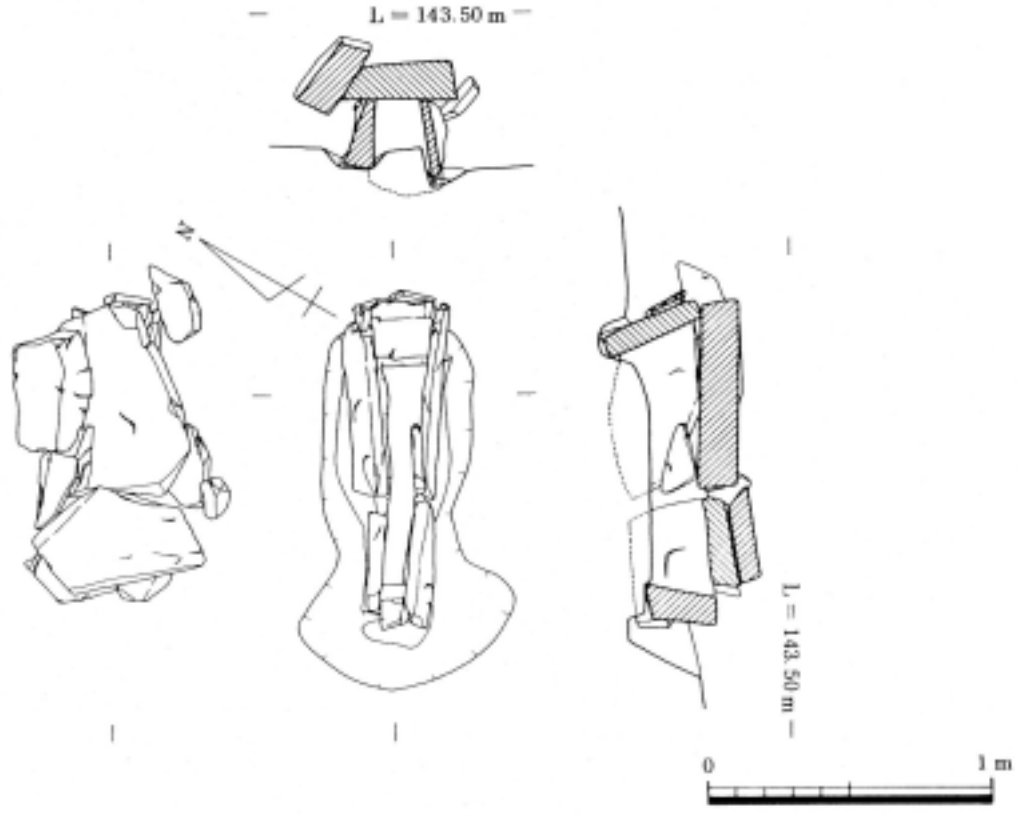
第80図　大谷遺跡Ｂ地点第１号住居跡実測図



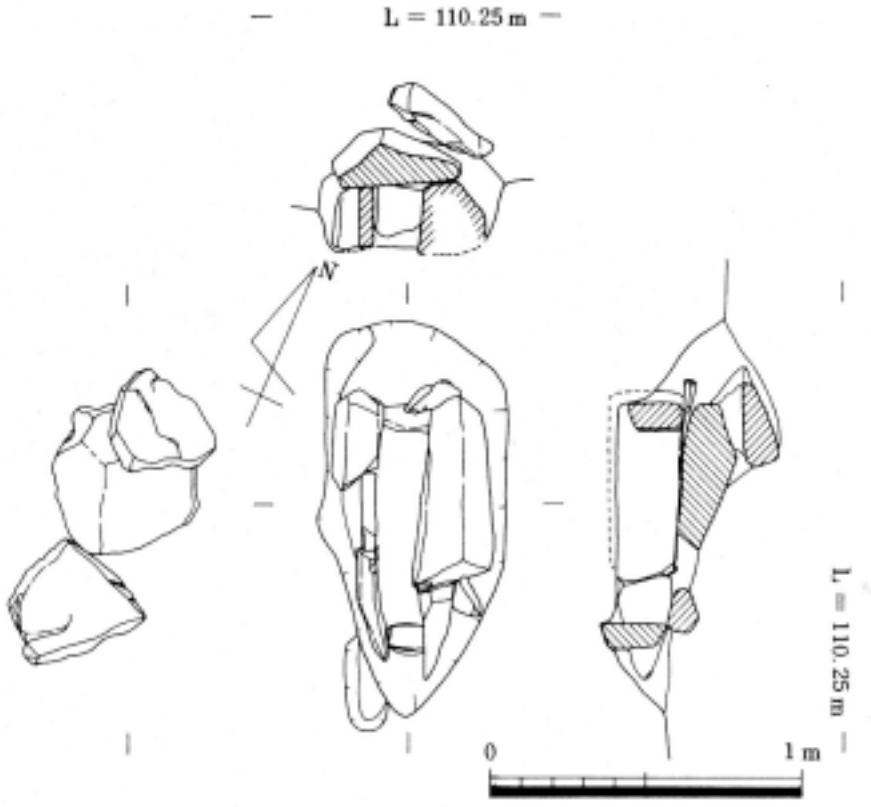
第 82 図　大谷遺跡Ｂ地点第３号住居跡及び芳ヵ谷３号古墳遺構配置図



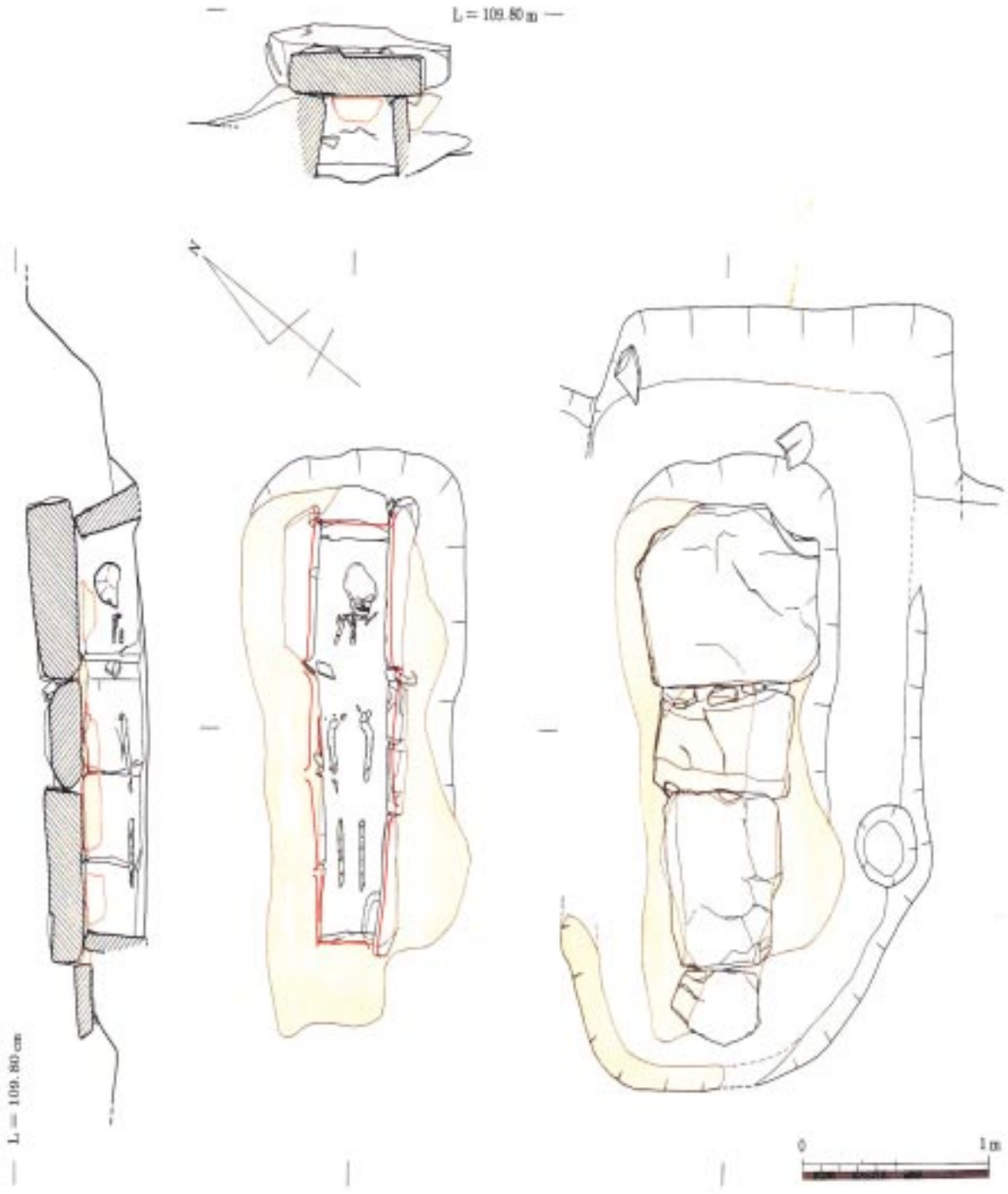
第81図　大谷遺跡Ｂ地点第２号住居跡実測図



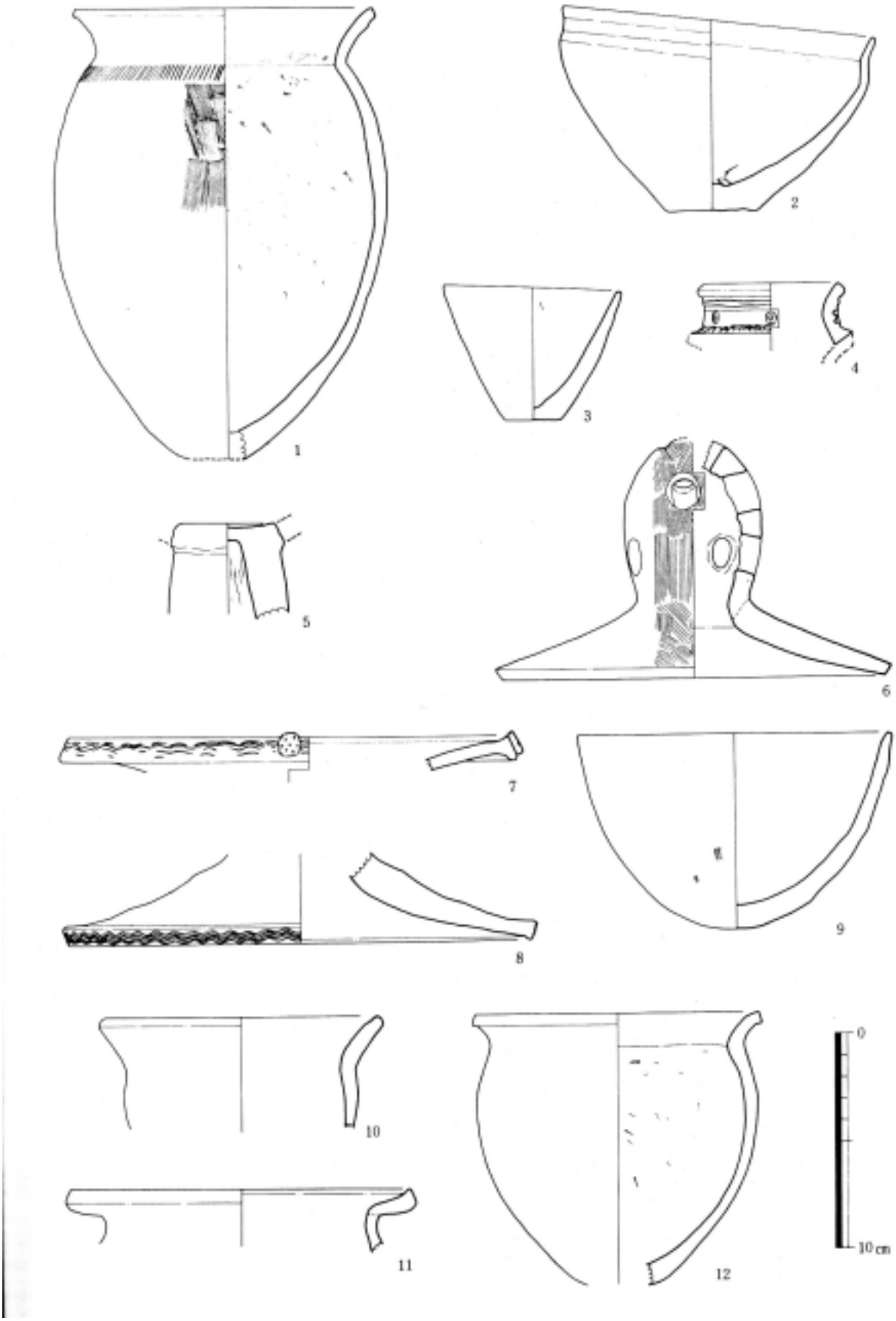
第83図　芳ヵ谷２号古墳主体部実測図



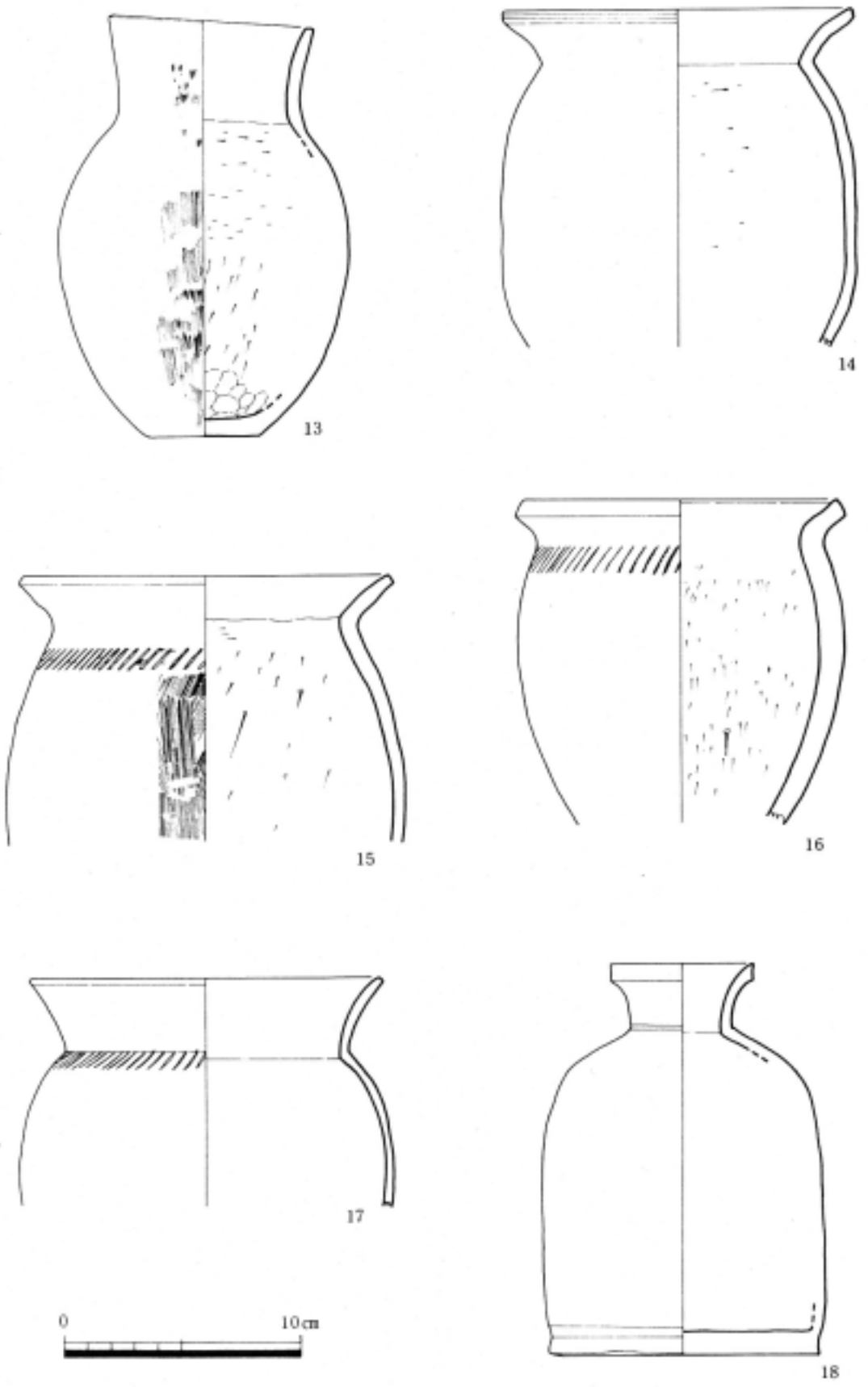
第85図　芳ヵ谷3号古墳第2主体部実測図



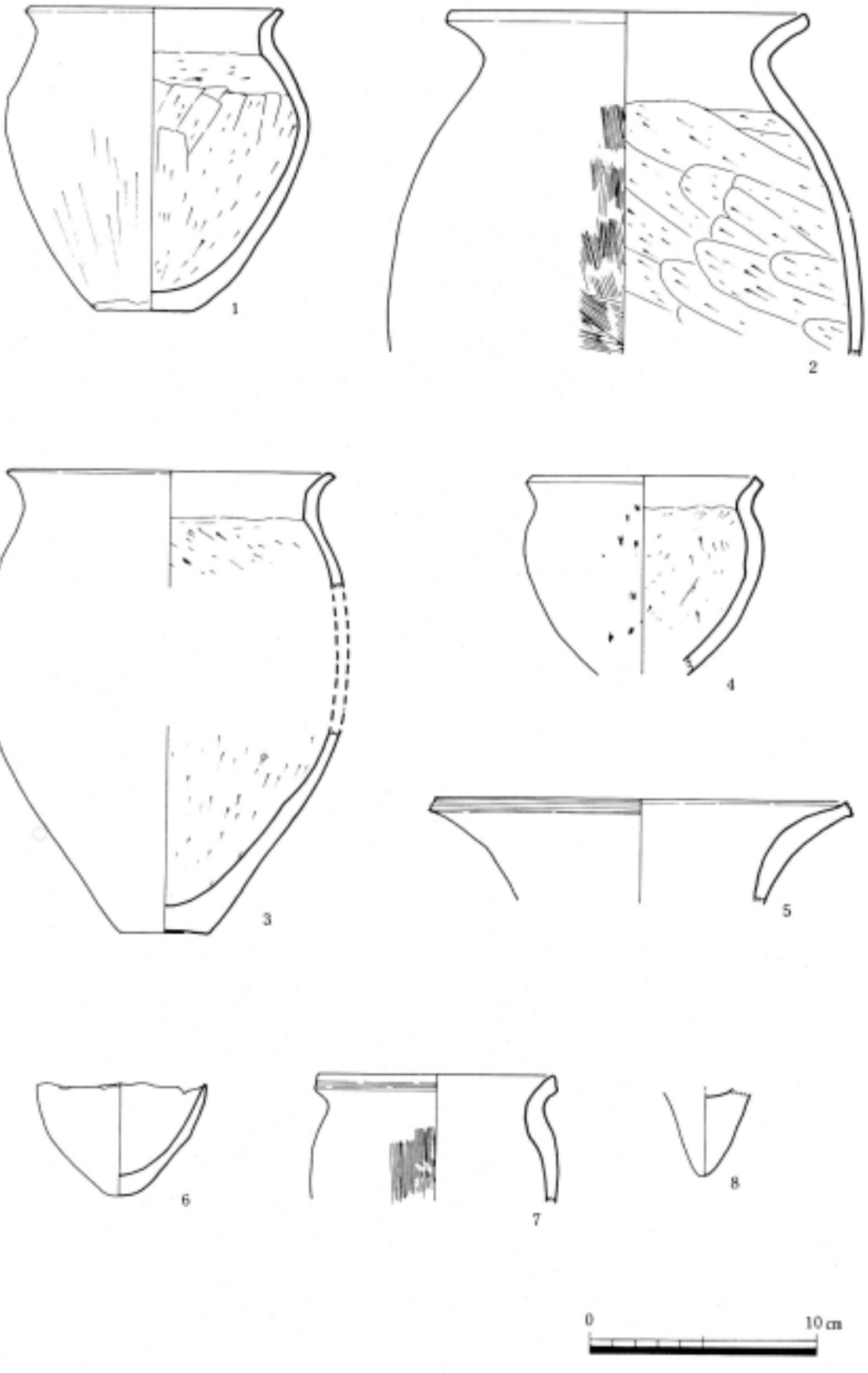
第84図　芳ヵ谷3号古墳第1主体部実測図



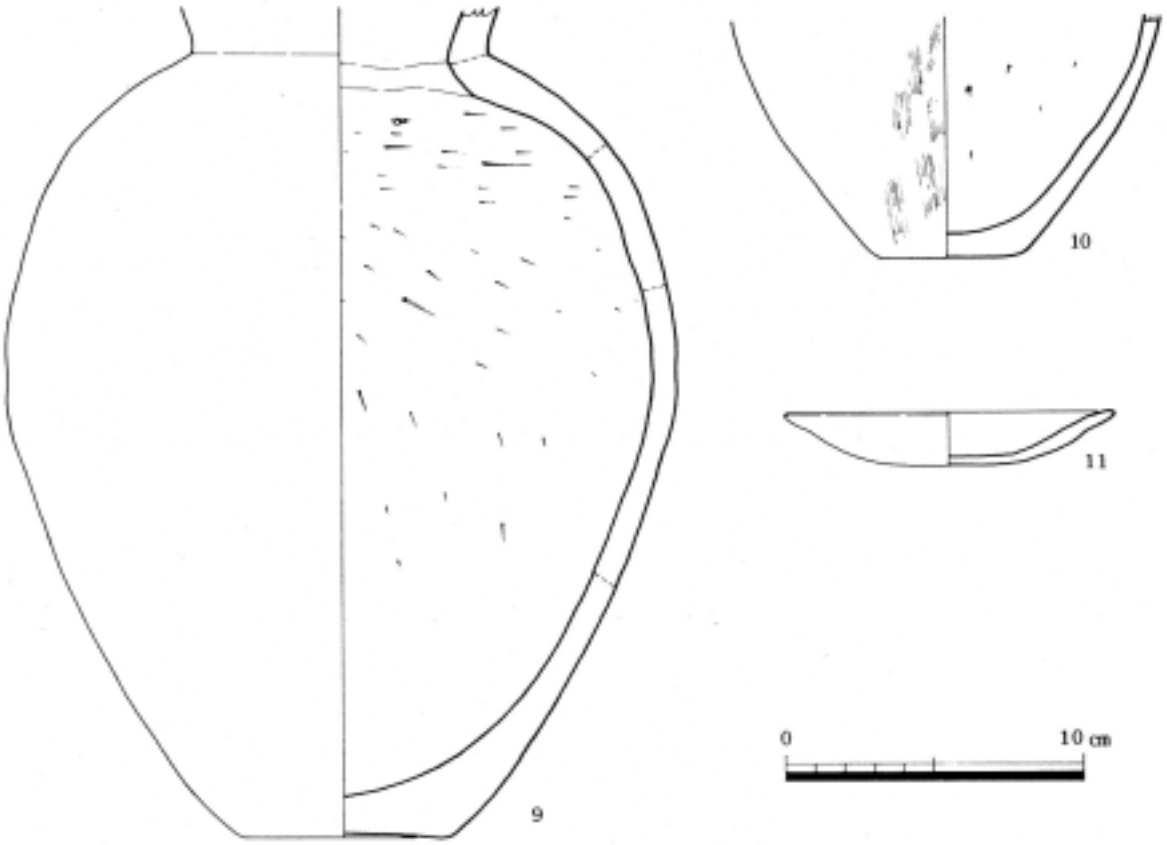
第 86 図　大谷遺跡Ａ地点出土土器実測図(1)



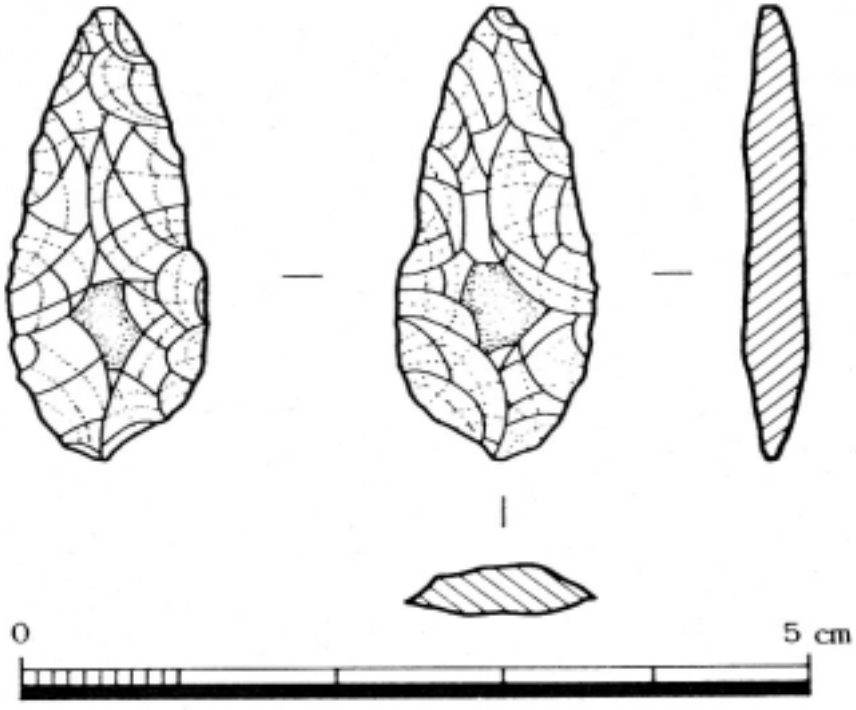
第 87 図　大谷遺跡 A 地点出土土器実測図(2)



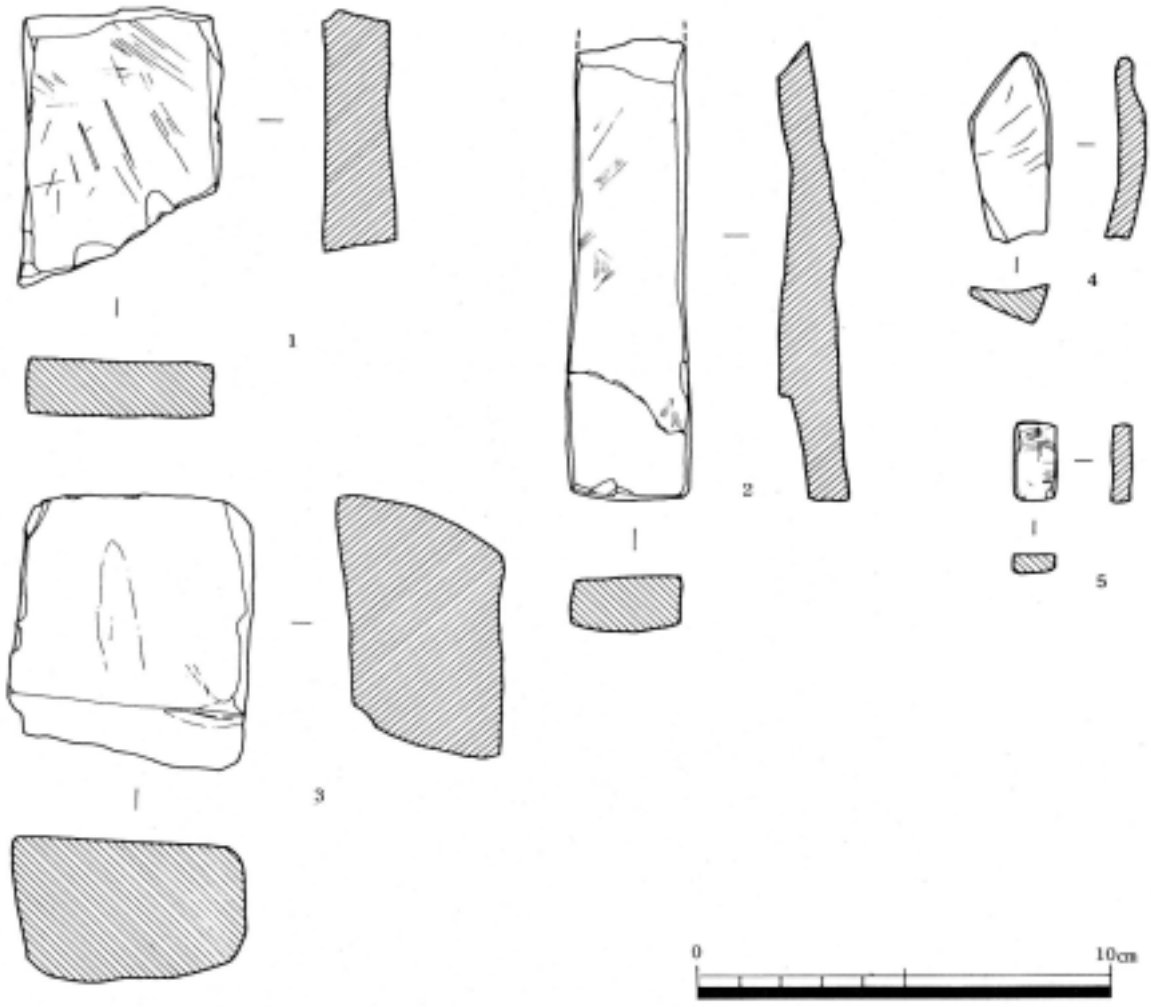
第 88 図　大谷遺跡Ｂ地点出土土器実測図(1)



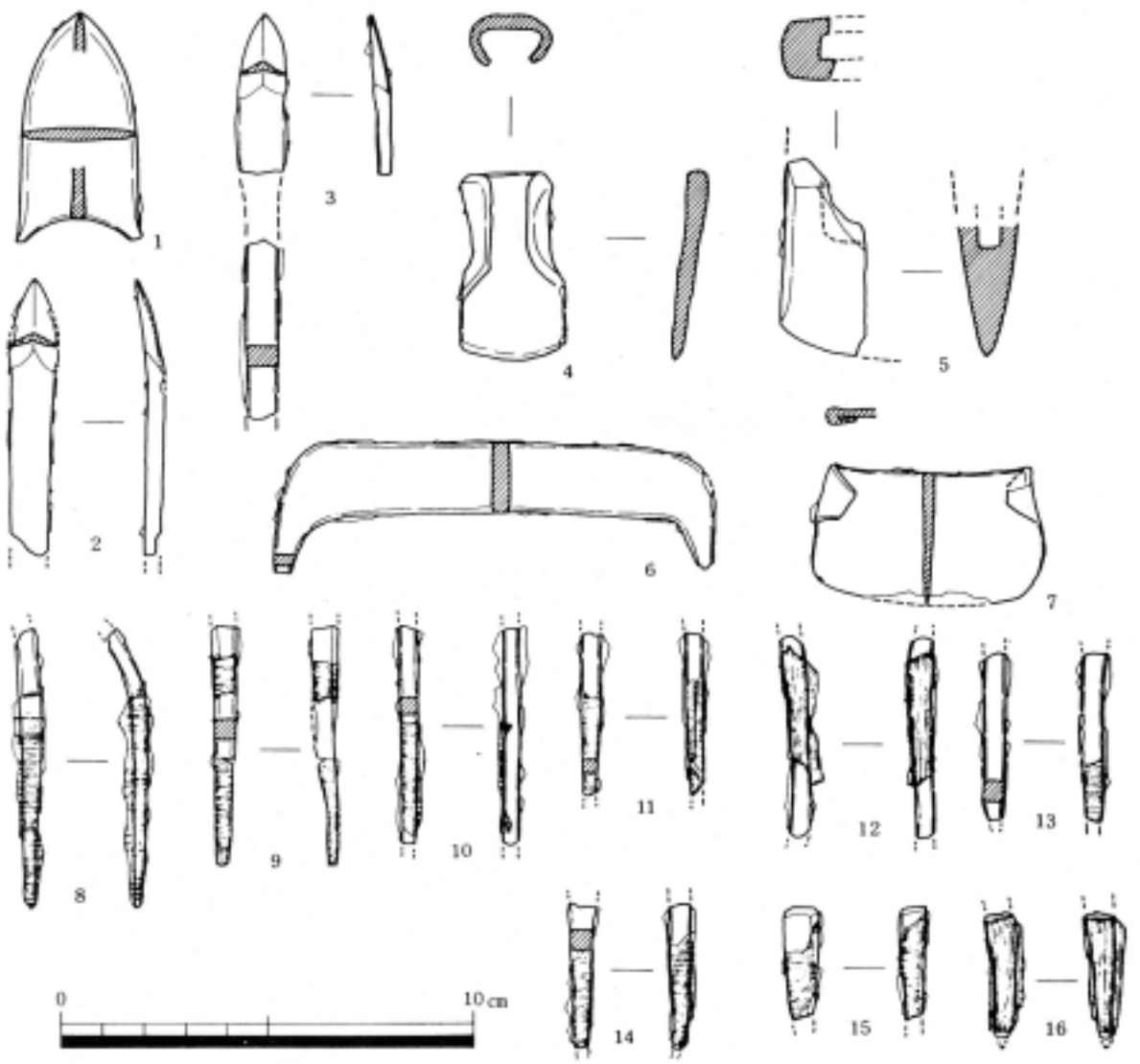
第 89 図　大谷遺跡Ｂ地点出土土器実測図(2)



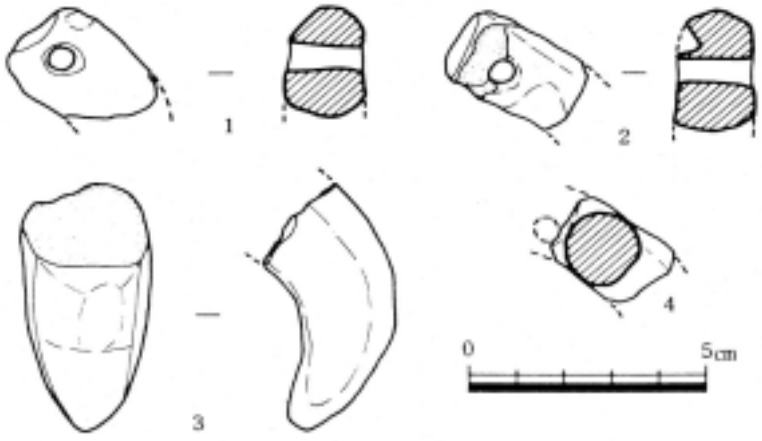
第 90 図　大谷遺跡Ａ地点出土石鏃実測図



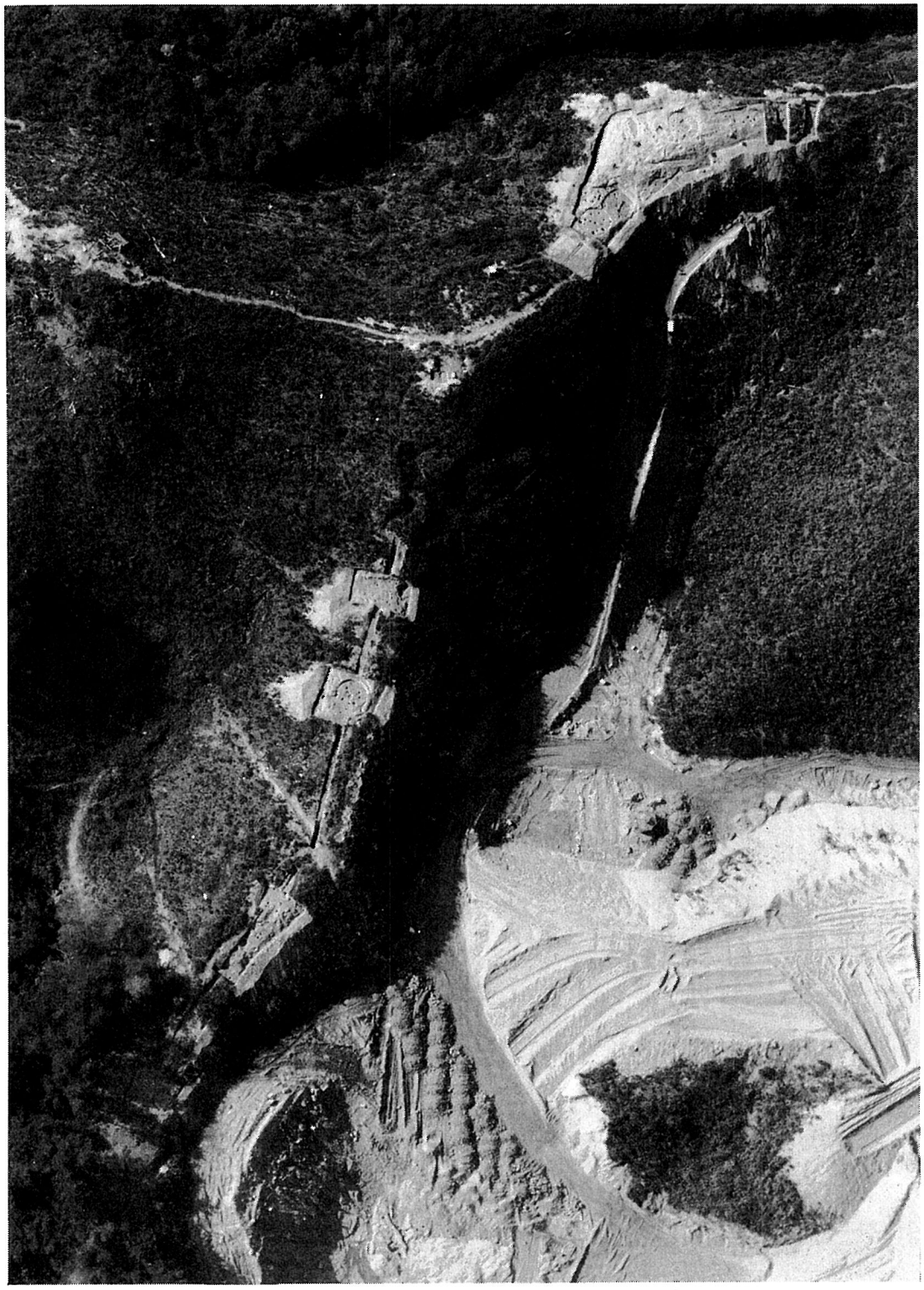
第 91 図　大谷遺跡出土砥石実測図



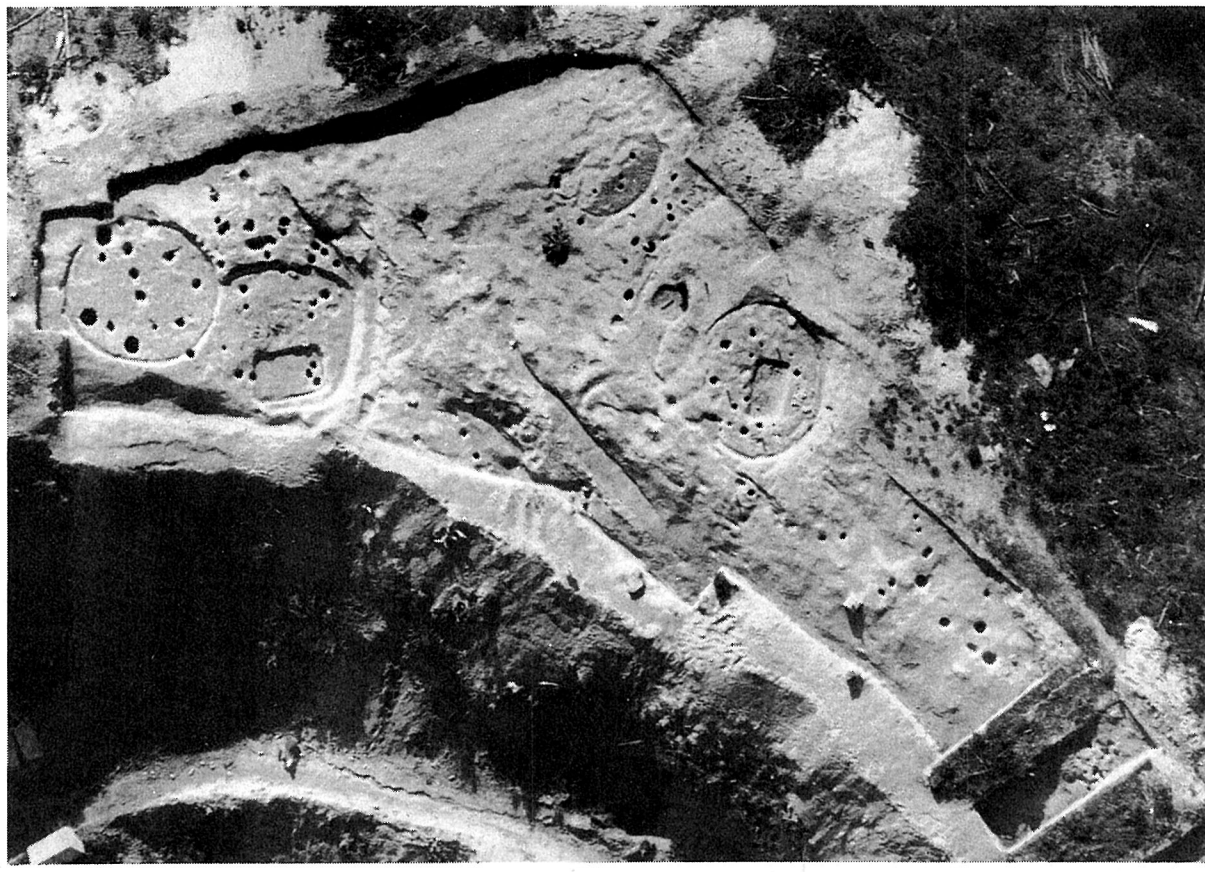
第 92 図　大谷遺跡出土鉄製品実測図



第 93 図　大谷遺跡出土土製勾玉実測図

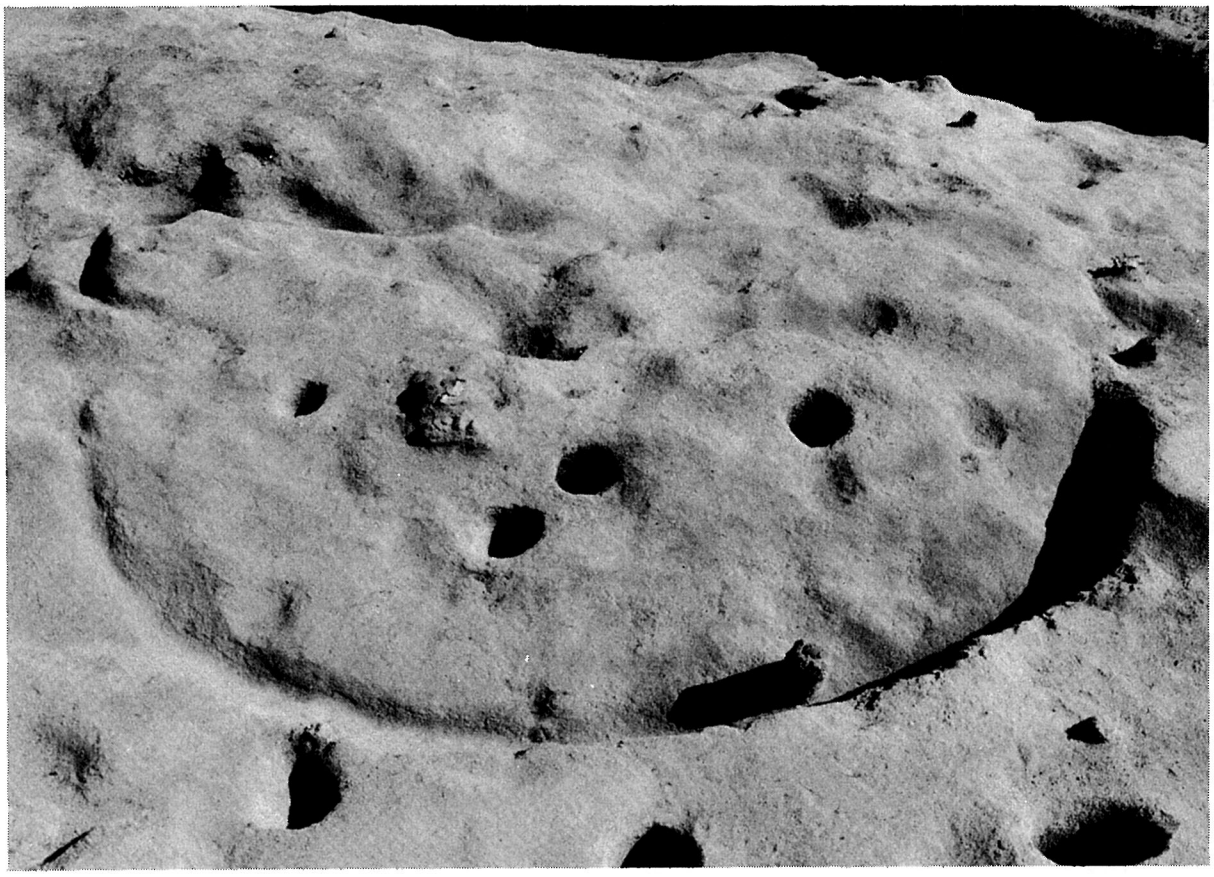


大谷遺跡全景



a. 大谷遺跡A地点全景

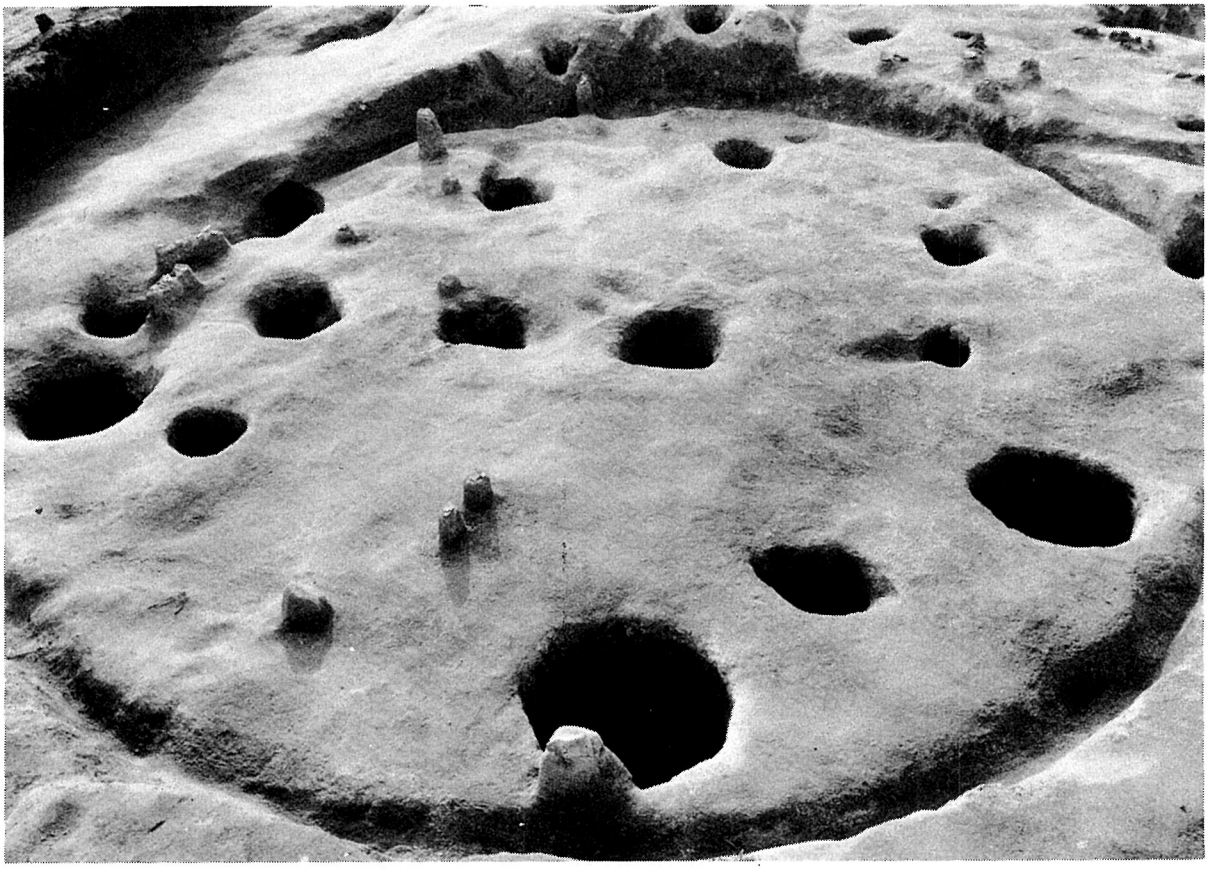
b. 大谷遺跡A地点第1号住居跡（西より）



a. 大谷遺跡A地点第2号住居跡（北より）

b. 大谷遺跡A地点第3号住居跡（南西より）

a. 大谷遺跡A地点第3号住居内土壙（北より）



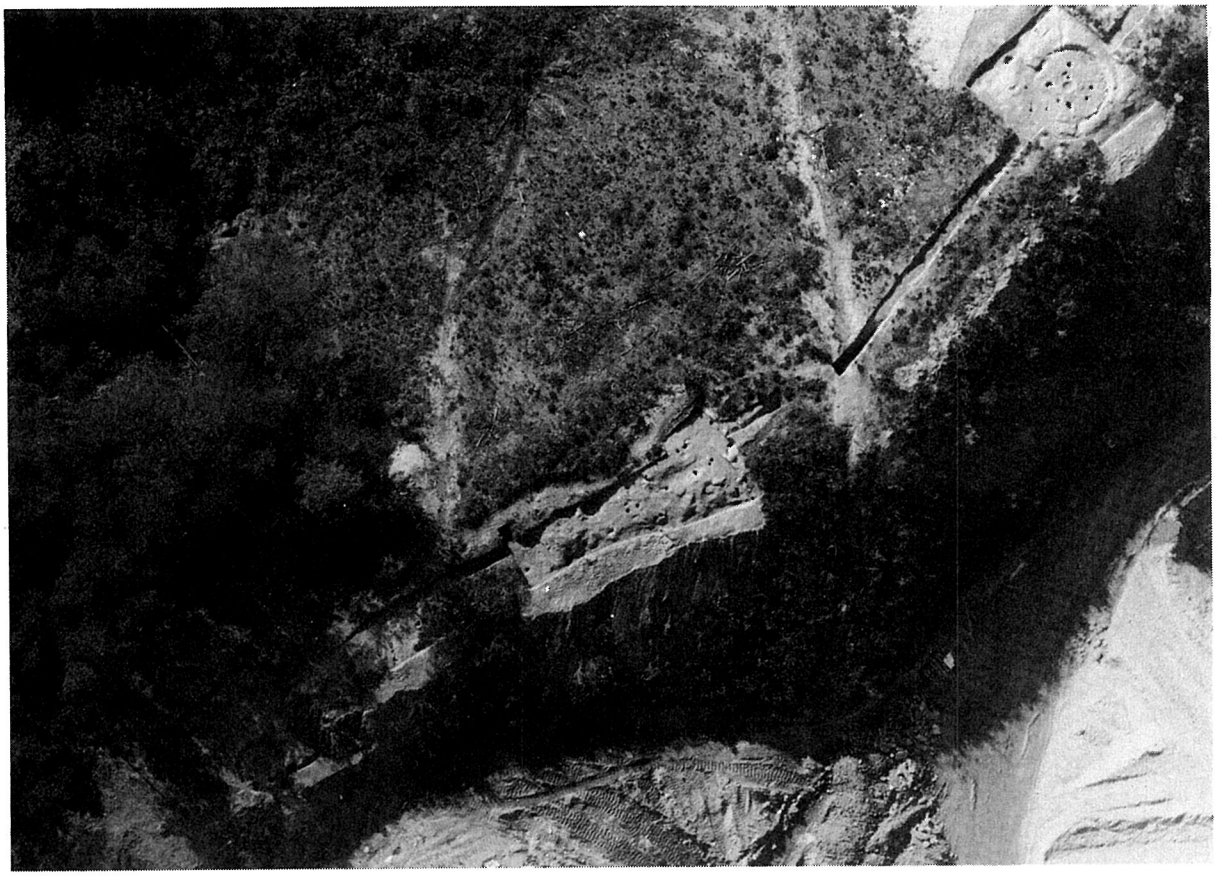
b. 大谷遺跡A地点第4号住居跡（東より）

a. 大谷遺跡A地点テラス状遺構（北より）

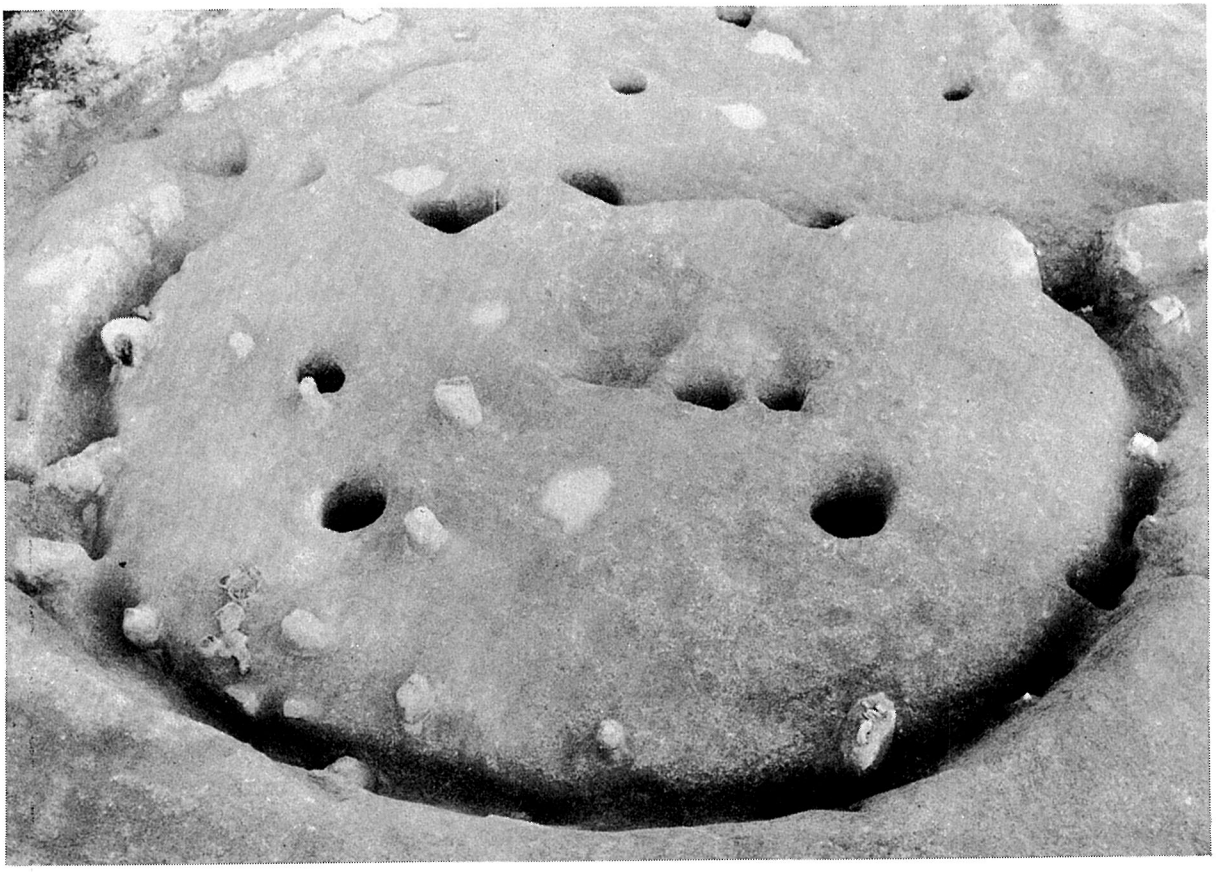
b. 大谷遺跡A地点大谷古墓（東より）

a. 大谷遺跡A地点大谷古墓遺物出土状態（東より）

b. 大谷遺跡A地点大谷古墓遺物出土状態（北より）



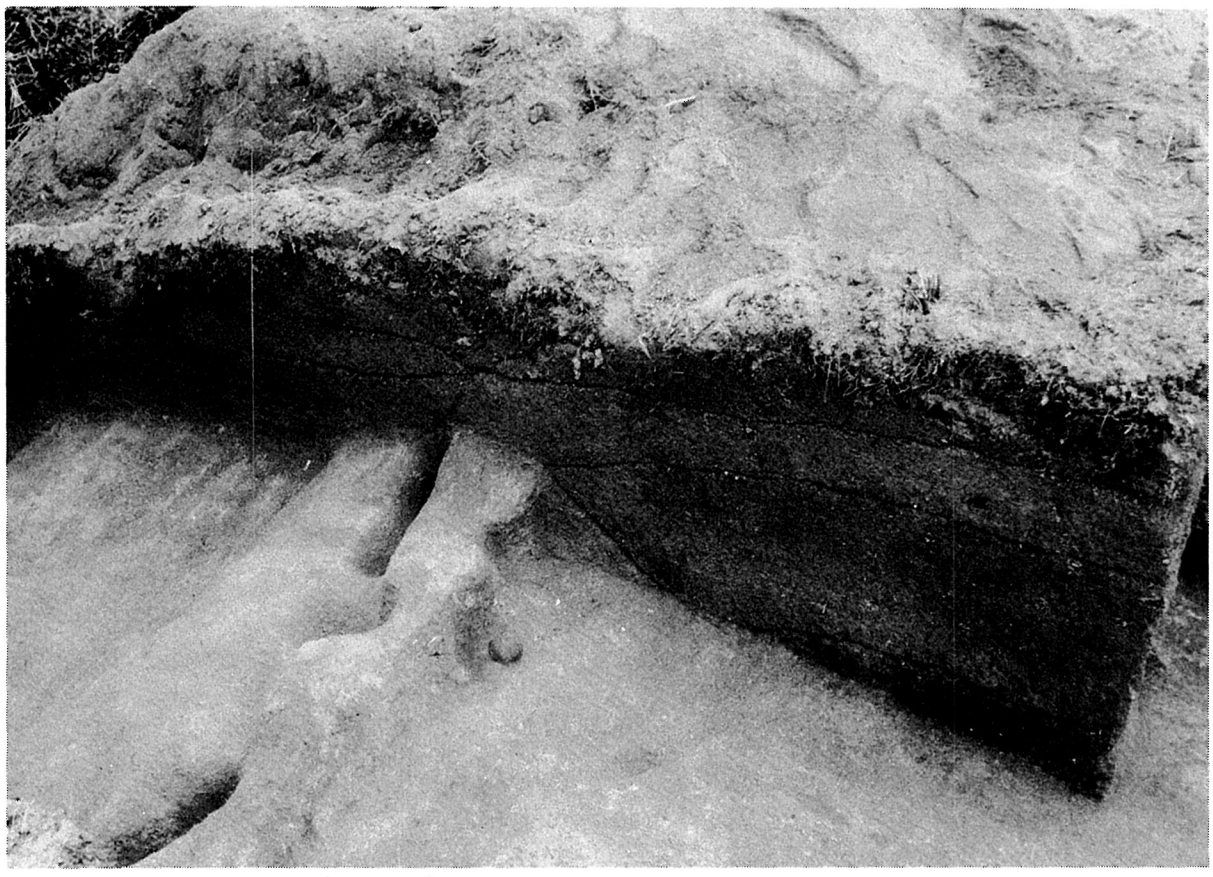
a. 大谷遺跡B地点全景



b. 大谷遺跡B地点第1号住居跡（南西より）

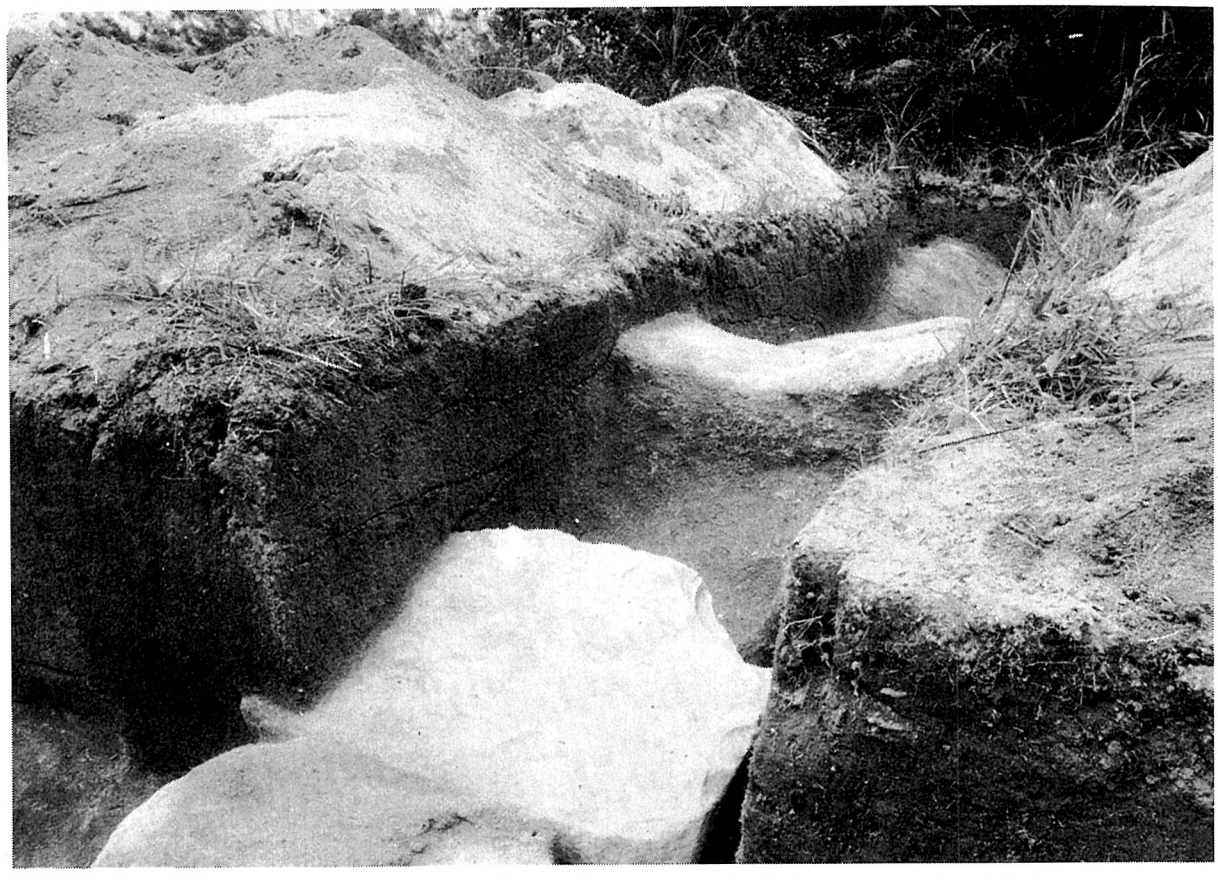
a. 大谷遺跡B地点第1号住居内遺物出土状態（東より）

b. 大谷遺跡B地点第2号住居跡（南より）



a. 大谷遺跡B地点第3号住居及び芳カ谷3号古墳南トレンチ断面（東より）

b. 大谷遺跡B地点第3号住居及び芳カ谷3号古墳北トレンチ断面（南東より）

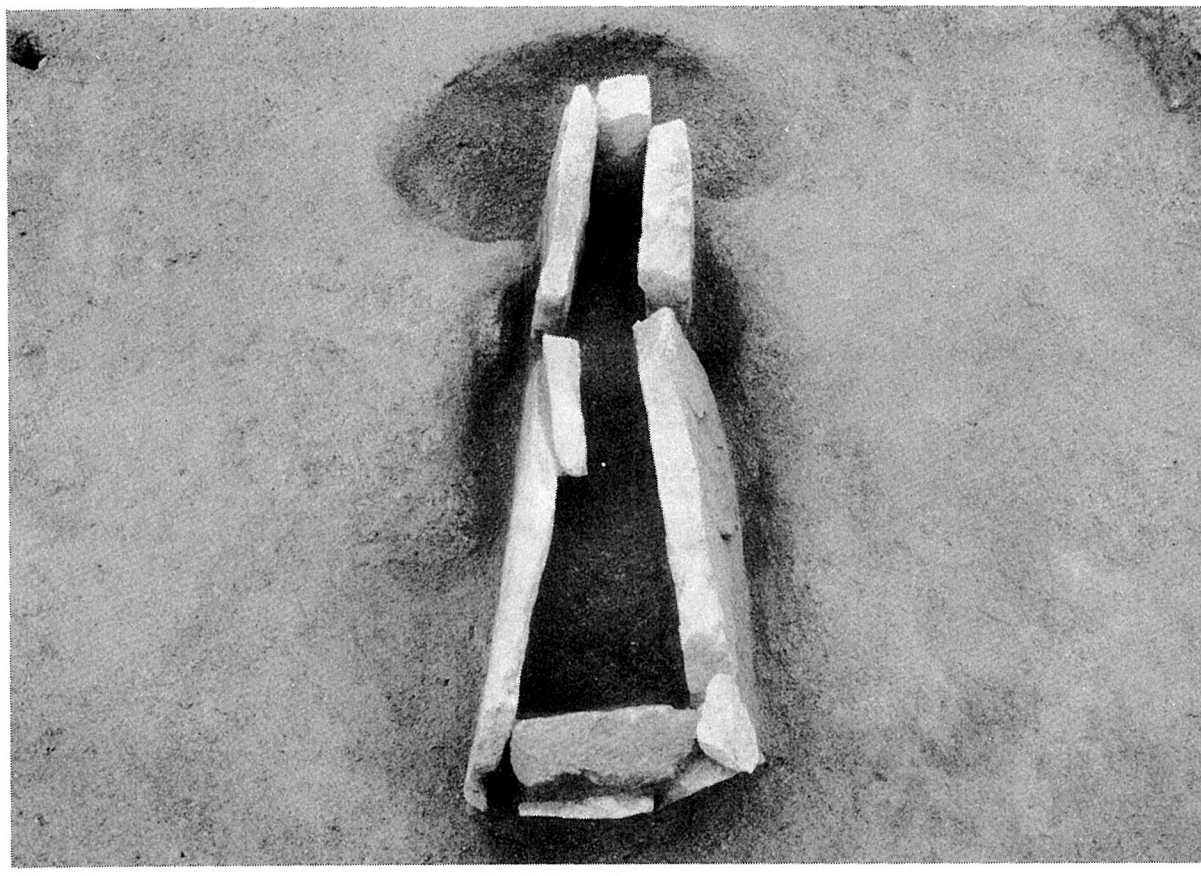


a. 大谷遺跡B地点第3号住居及び芳カ谷3号古墳東トレンチ断面（南から）

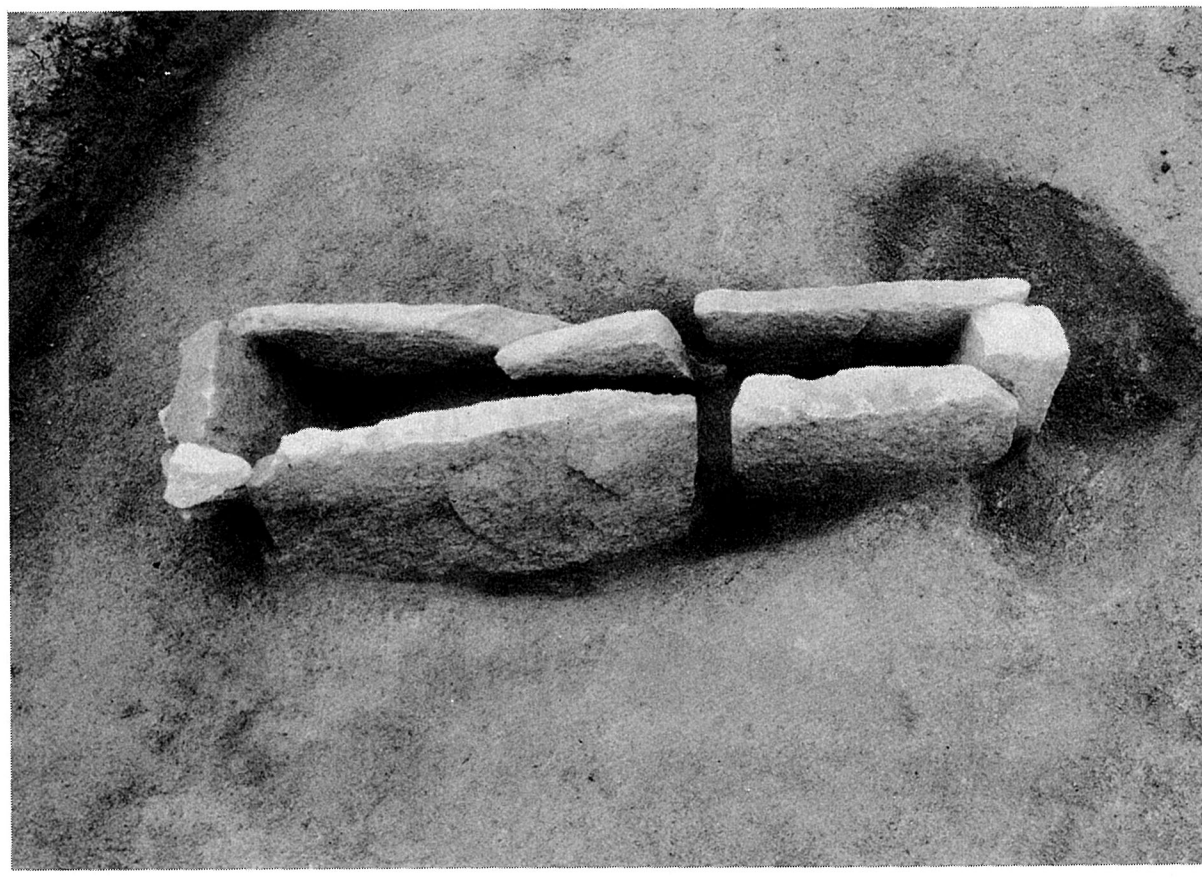
b. 大谷遺跡B地点第3号住居及び芳カ谷3号古墳西トレンチ断面（南西から）

a. 芳カ谷2号古墳（東より）

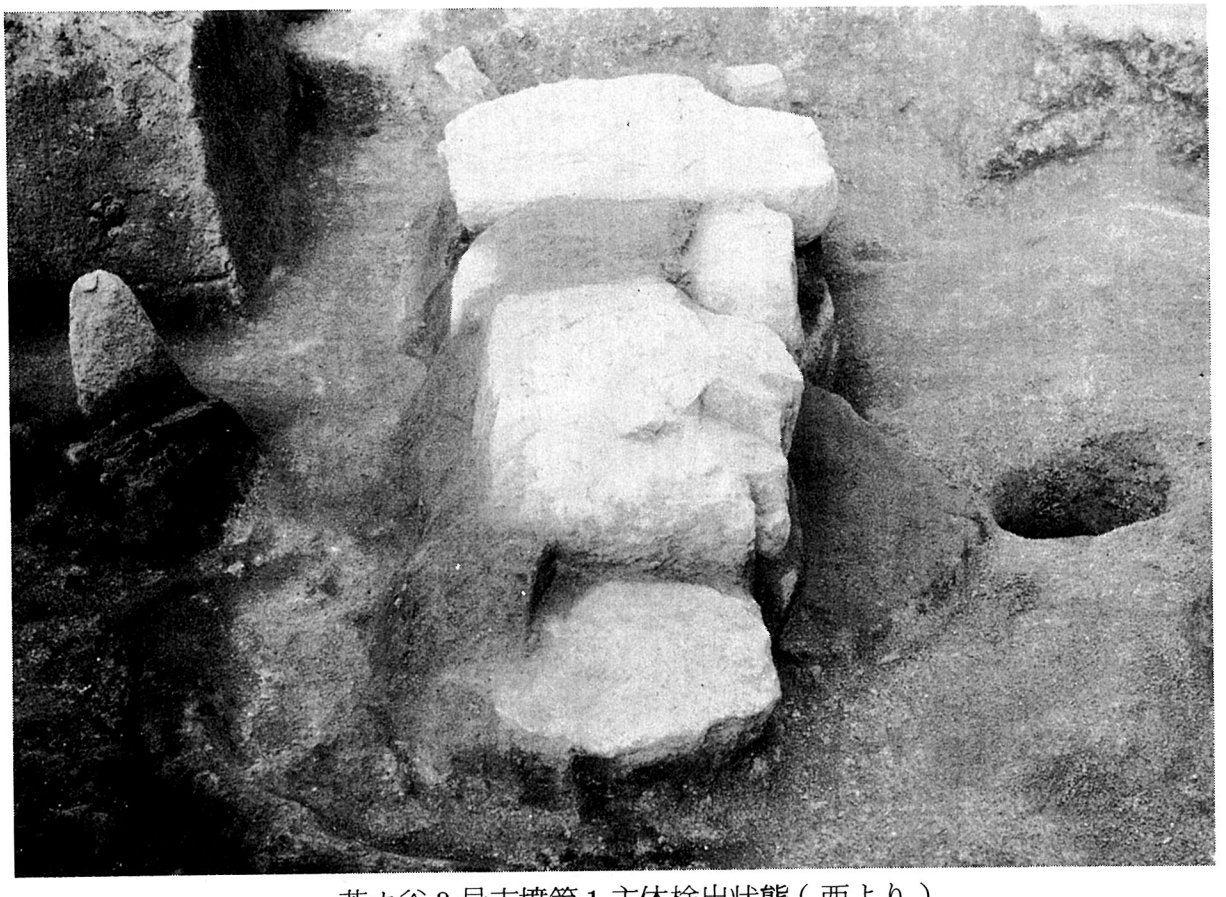
b. 芳カ谷2号古墳（北より）



a. 芳カ谷２号古墳（開棺後，東より）

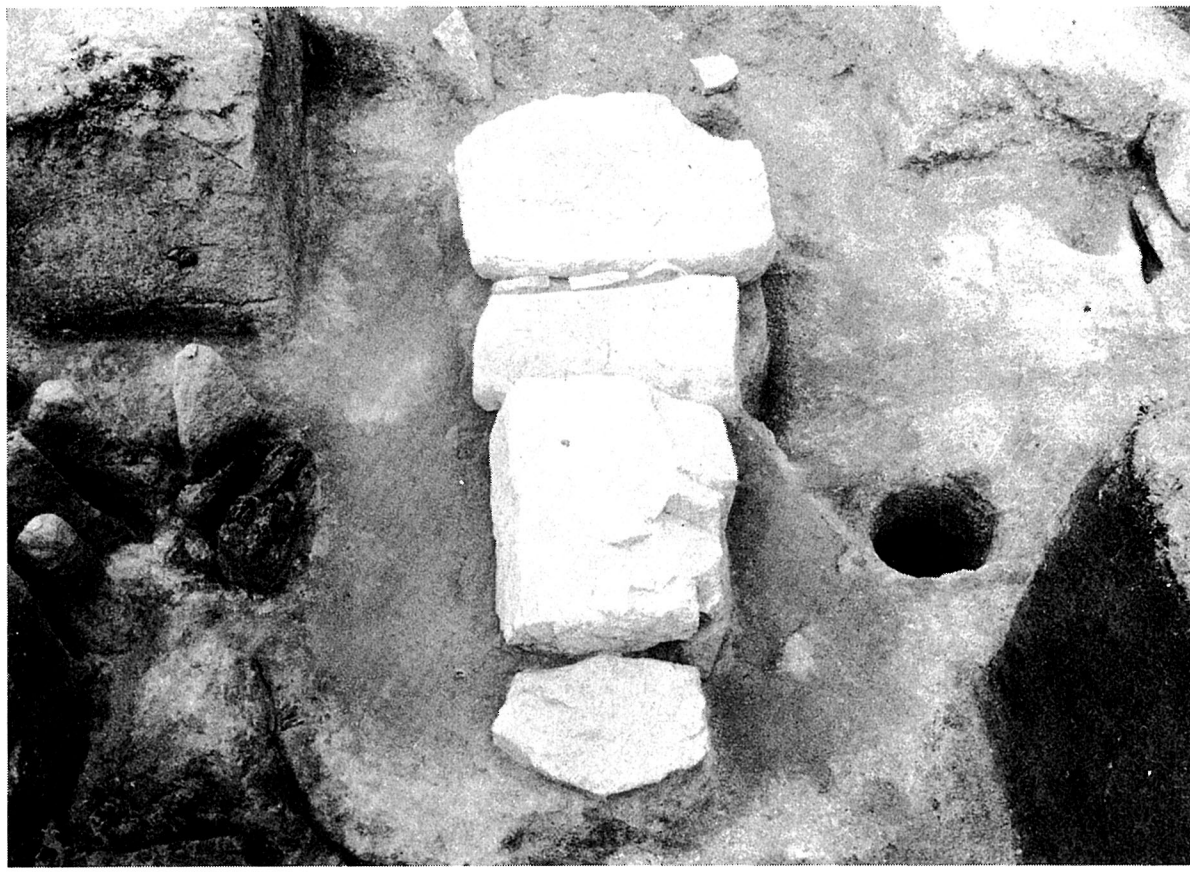


b. 芳カ谷２号古墳（開棺後，北より）



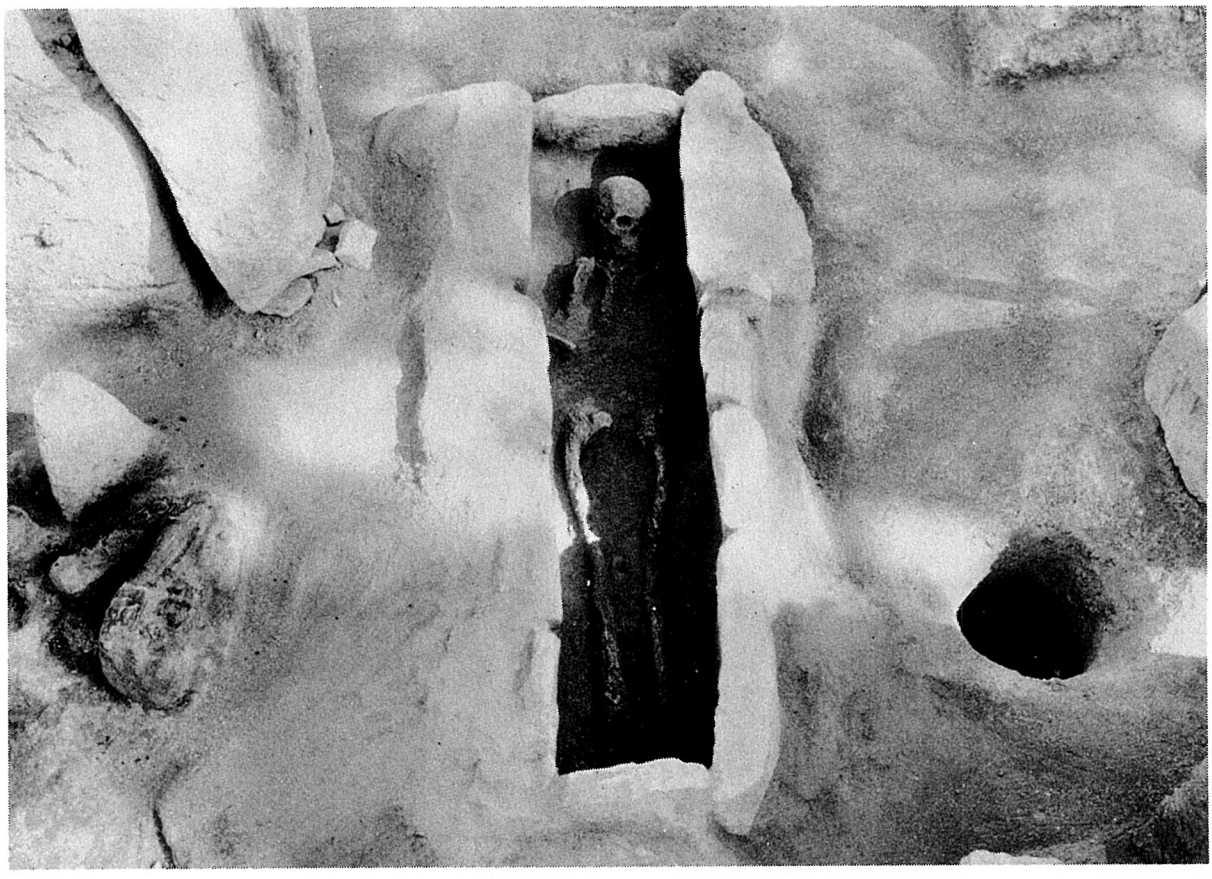
a. 芳ヵ谷3号古墳第1主体検出状態（西より）

b. 芳ヵ谷3号古墳第1主体検出状態（南より）

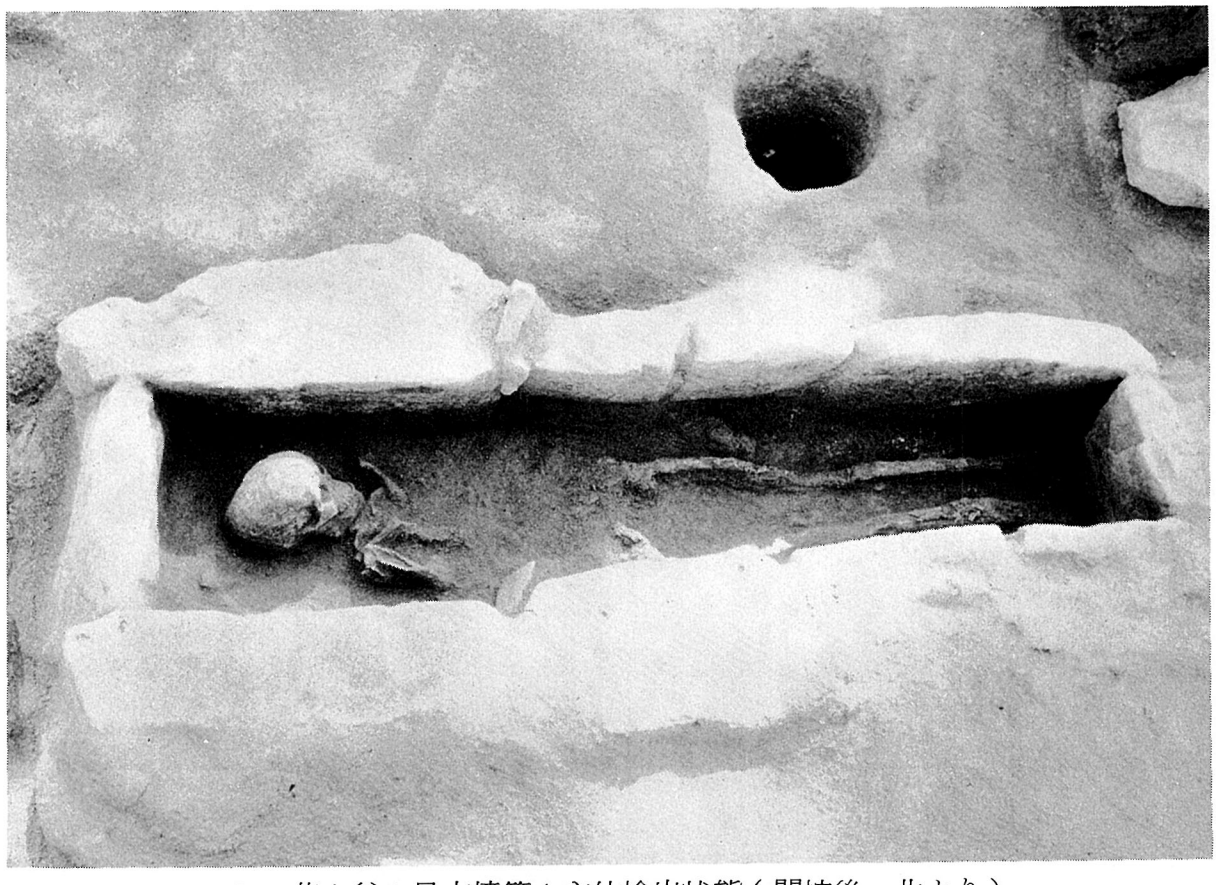


a. 芳カ谷3号古墳第1主体検出状態（粘土除去後，西より）

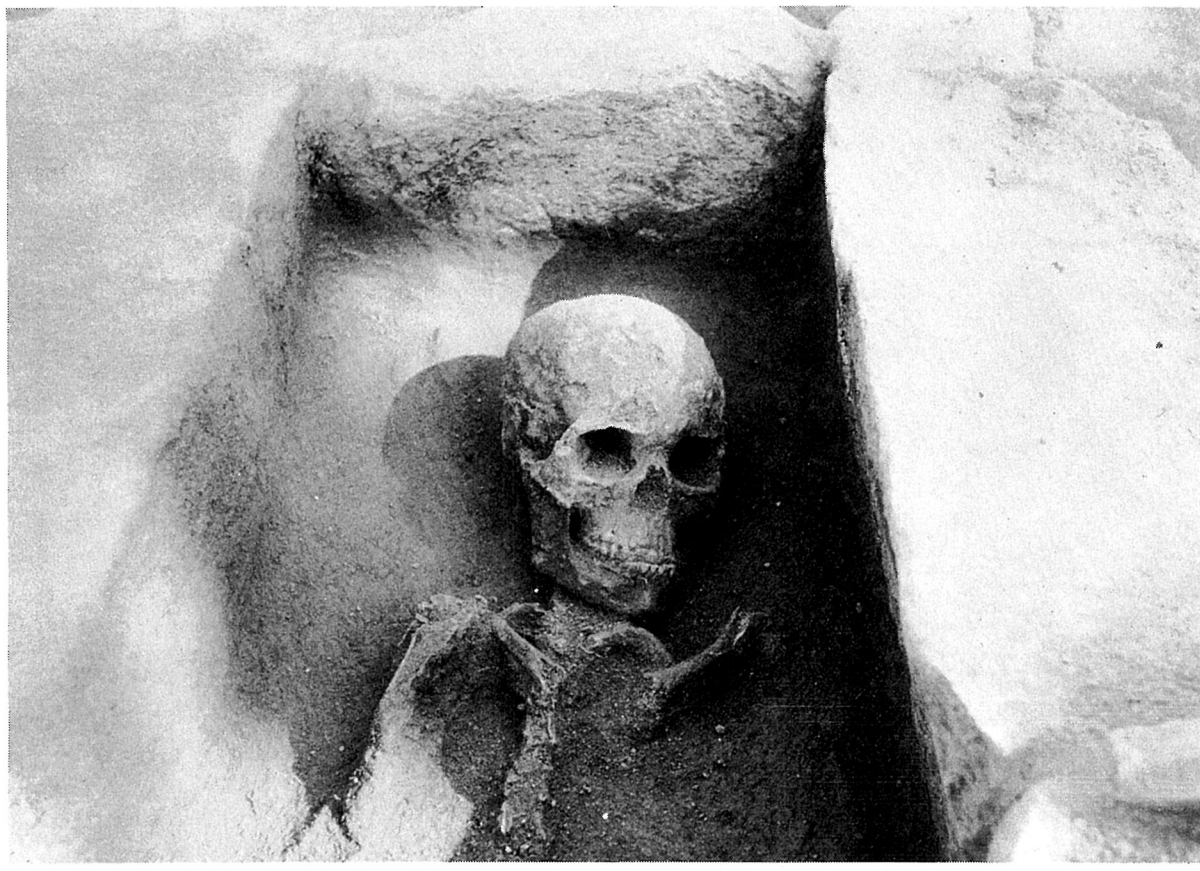
b. 芳カ谷3号古墳第1主体検出状態（粘土除去後，南より）



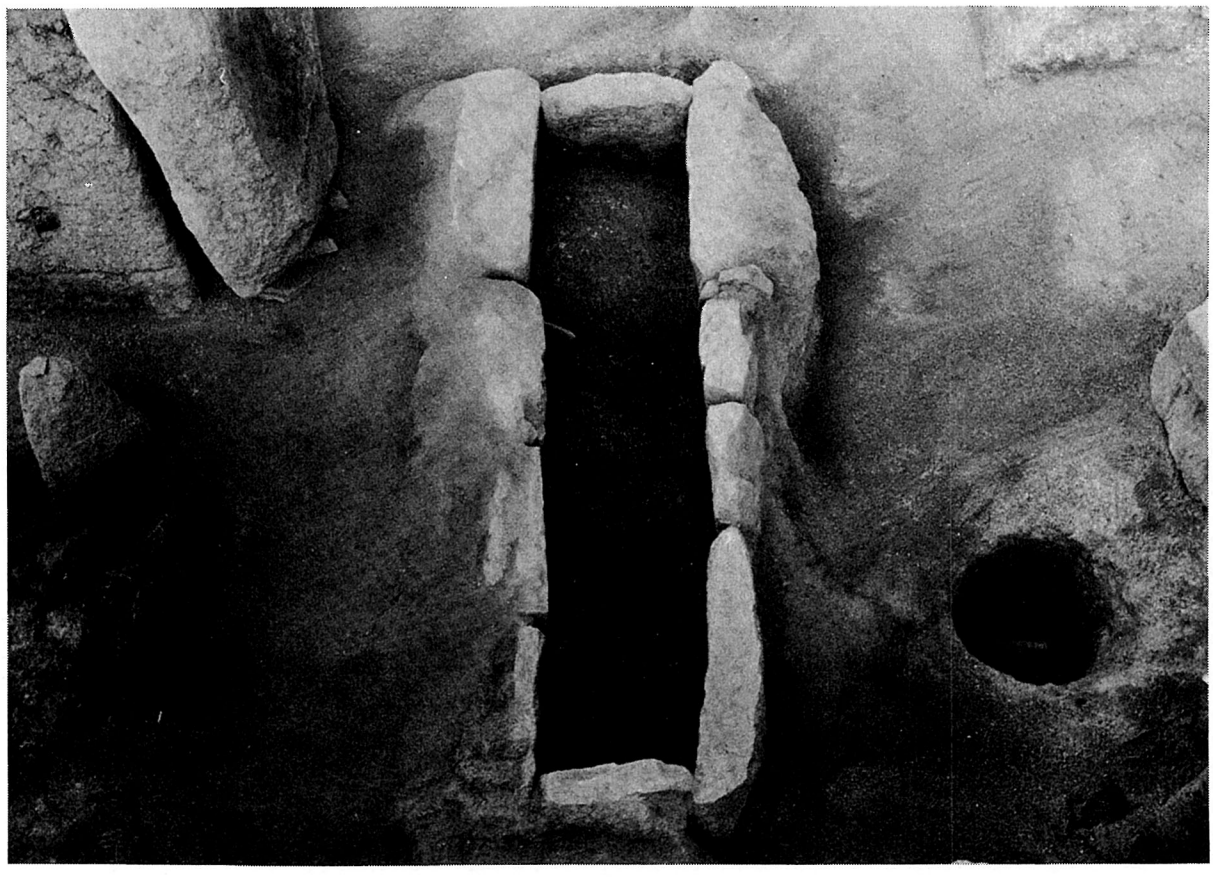
a. 芳ヵ谷3号古墳第1主体検出状態（開棺後，西より）



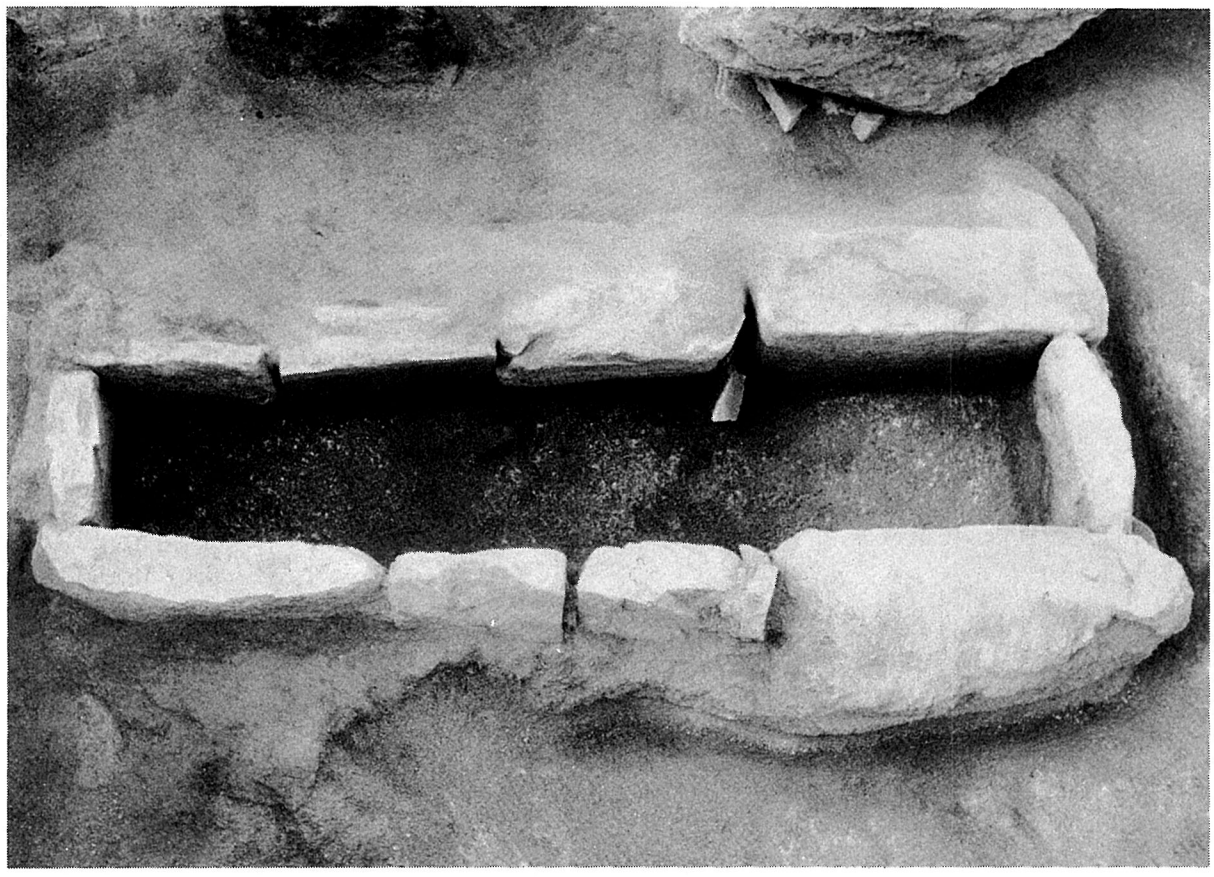
b. 芳ヵ谷3号古墳第1主体検出状態（開棺後，北より）



a　芳ヵ谷３号古墳第１主体人骨出土状態（西より）



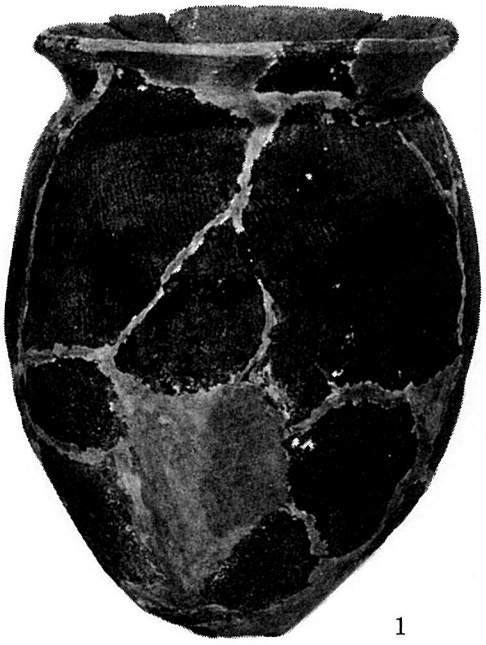
b　芳ヵ谷３号古墳第１主体人骨出土状態（西より）



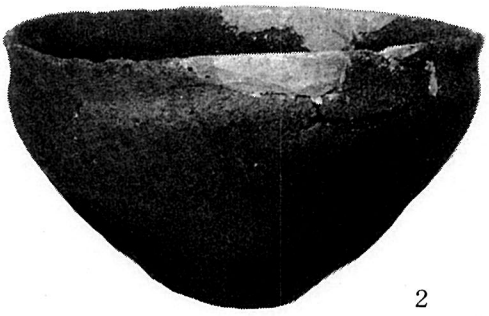
a　芳カ谷３号古墳第１主体人骨出土状態（完掘後，南より）

b. 芳カ谷３号古墳第２主体部検出状態（東より）

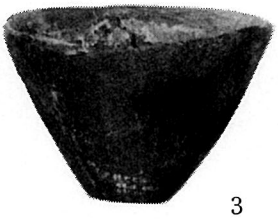
a. 芳カ谷3号古墳第2主体部検出状態（開棺後，東より）



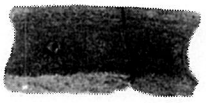
1



2



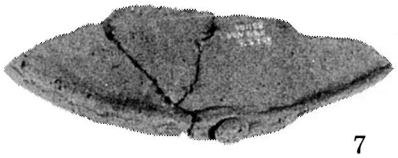
3



4

5

6



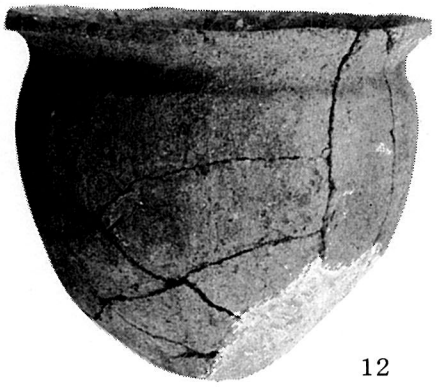
7

8

9

10

11



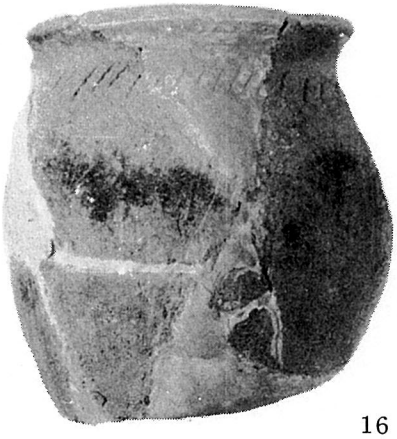
12

大谷遺跡 A 地点出土土器

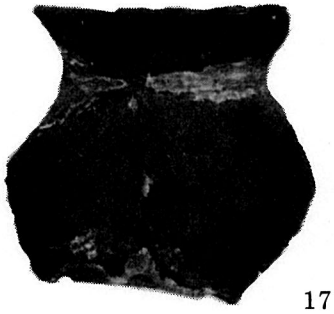
13

14

15



16



17

18

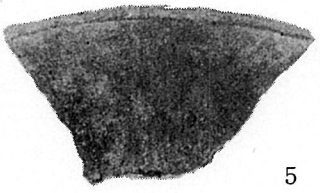
大谷遺跡A地点出土土器

1

2

4

3



5

6

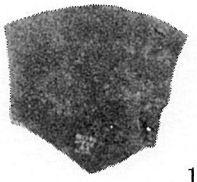
7

8

大谷遺跡B地点出土土器

9

10

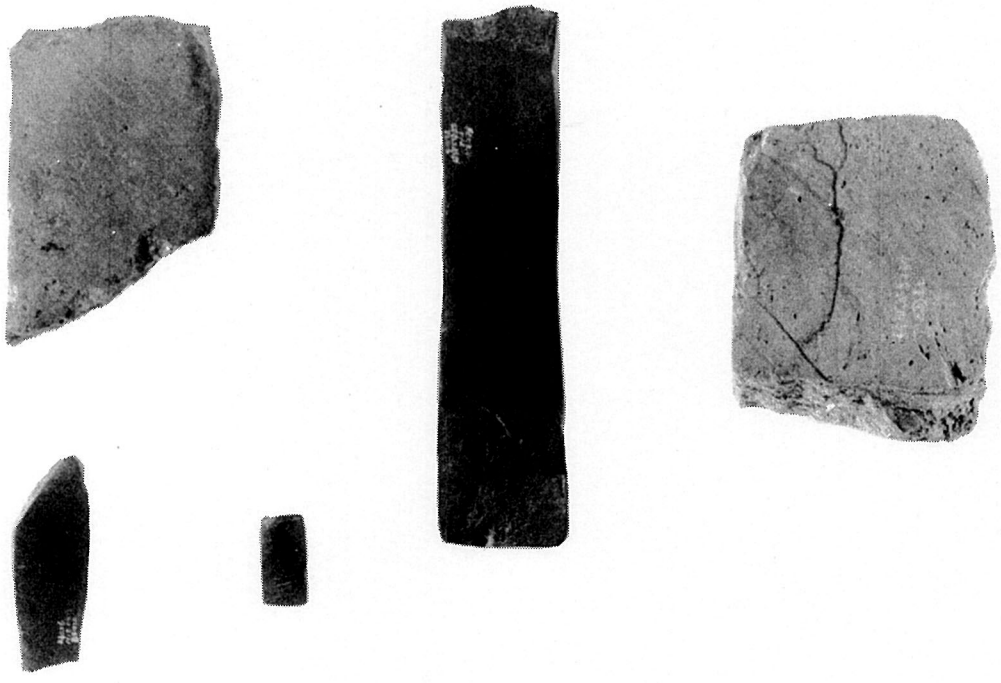


11

a. 大谷遺跡B地点出土土器

b. 大谷遺跡出土土製勾玉・石鏃（実大）

a. 大谷遺跡出土鉄製品



b. 大谷遺跡出土砥石

広島市の文化財 第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告

1984年3月

編　集
発　行　広島市教育委員会
（社会教育部社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL（082）245－2111（代）